概説・ベルクソンの形而上学(10)

―カント形而上学との関係性を基本視座として―

坂　本　武　憲

目　次

1　はじめに
2　著作「意識の直接的所与に関する試論」(1889) の検討
Ⅰ　カント形而上学の大要（参考）
Ⅱ　本著作の主要な問題関心
Ⅲ　心理学的な諸状態の強度について
（1）延長量と強弱量（強度）の区別の曖昧性
（2）「広げられないもの」の有する二種類の強度
（3）外的要因により表象される「努力」の強度
（4）単純な状態に該当する感情・感覚の強度
（5）小　括
Ⅳ　意識の諸状態の多数性
―持続の理念―
（1）数の理念について
（2）精神上の所為（感覚・感情・考え）の質的数多性
（3）質的数多性と数的数多性の区別の重要性
（4）質的数多性を数的数多性で展開する可能性
（5）基本的私・自己を見出す意識の分離と確立
(以上142号)
Ⅴ　意識の諸状態の有機体化
―自由―
（1）自由を論証する仕方について
（2）機械論とダイナミスムにおける自由の概念
（3）自由に対する決定論の立場からの反対
（4）観念連合論に基づく決定論の疑問点
（5）決定論と反対説「自由な選択意思論」の批判的考察
（6）天文学的な時間と心理学的な時間の相違

（7）因果性の法則に対する自由の擁護
（8）自由の定義の不可能について
Ⅵ　結　論
（1）これまでの考察の要約
（2）自説に基づくカント形而上学の評価
Ⅶ　若干の経過的コメント
（以上143号）
3　著作「物質と記憶」（1896年）の検討
Ⅰ　本著作の全体を貫く姿勢
Ⅱ　本著作の主要な方針
（1）本著作が前提とする物質理論
（2）本著作の考察方法
Ⅲ　表象のための諸様態（イマージュ）の選定について
―身体の役割―
（1）我々と客体の様態（イマージュ）との関係
［A］客体認識における我々と客体の様態（イマージュ）との関係
［B］実践的行為での我々の身体と客体の様態（イマージュ）との関係
（2）宇宙と我々の身体の実在的様態（イマージュ）上での関係
（3）我々の身体とそれを取り囲む諸客体との関係
［A］我々の身体が果たす役割の観点からの考察
［B］我々の神経組織が果たす役割の観点からの考察
（4）脳と神経組織の様態（イマージュ）が教えるそれら器官の機能
―我々の知覚との関係で―
［A］外的世界の知覚における脳と神経組織の機能的限界
［B］脳と神経組織の運動が果たす反作用の準備機能
［C］宇宙の知覚と脳・神経組織との関係の誤解原因
（5）「宇宙」と「宇宙の知覚」の共存について
［A］両者の対比的提示
［B］両者の体系間に維持される関係についての哲学的理論
［C］宇宙と宇宙の知覚の体系が有する自足性の確認
（6）外的知覚一般と我々の行為との関係
［A］知覚・純粋認識・不確定な行為について
［B］意識的知覚の可能性について
［C］不確定な行為について意識的知覚が生ずるメカニズム
［D］意識的知覚が成立しうる前提の提示
（7）所与としての客体の様態（イマージュ）と知覚の成立
［A］知覚は客体の様態（イマージュ）からの導きで成立するとの論証

［B］心理学者による記憶の機能を無視した誤った見解
［C］知覚の成立と外的客体からの衝撃の神経組織による伝達
［D］知覚と我々の動的活動力との関係
（以上144号）
（8）知覚と感覚・感情との関係
［A］外的世界を内的感覚・感情の投影とする理論の不可能
［B］外的世界からの衝撃による感覚・感情の成立説の優位性
［C］知覚と感覚・感情における身体の作用の相違
［D］従来の理論の根本的変革の必要性
（9）知覚と記憶の関係について
［A］知覚と記憶を結ぶ意識の役割
［B］現実の直観の基礎（知覚）と以前の直観の基礎（記憶）
［C］「純粋知覚」と「純粋記憶」の性質上の相違
［D］「純粋記憶」の考察が精神について切り開く展望
Ⅳ　諸様態（イマージュ）の蘇生（reconnaissance）について
―記憶と脳―
（1）経験により検証されるべき記憶に関する諸命題
［A］三つの命題の定式化
［B］第一命題（二つの形式の記憶）の詳細な説明
［C］第二命題（記憶の蘇生一般）の詳細な説明
［D］第三命題（「様態―記憶」から運動への移行）の詳細な説明
（以上145号）
（2）聴覚的記憶障碍を中心とする記憶の蘇生理論の検証
［A］聴覚的記憶障碍を検証の中心とする理由
［B］連続的な音を言葉の音節等で識別し発音する機能の障碍
［C］記憶の注意深い蘇生の仕方（聴覚的記憶障碍に基づく考察）
（3）記憶に関する新たな理論構築の方向性
［A］知覚と記憶の結合について
［B］心的知覚に伴う感覚の配置がなされる仕方について
Ⅴ　諸様態（イマージュ）の残存について
―記憶と精神―
（1）我々の不確定的行為における知覚と記憶
［A］純粋記憶・記憶―様態（イマージュ）・知覚のプロセス
［B］記憶と知覚の関係についての観念連合論に対する批判
［C］「想像すること」と「思い出すこと」の区別
（2）現在の知覚と過去の純粋記憶との対比的考察
［A］心理学的状態としての現在の意義

［B］我々の存在の物質性としての現在
［C］知覚の現在性と純粋記憶の潜在性
（3）無意識の知覚および無意識の記憶の実在性（論点整理）
［A］「意識していること」と「存在すること」との区別
［B］空間における諸客体の無意識の知覚
［C］時間における無意識の知覚（記憶）の存否
［D］無意識の知覚と無意識の記憶の意識による把握・使用
（4）無意識の記憶の実在可能性に関する諸推論
［A］心理学的状態の現実性の意識との関係での推論
［B］無意識な記憶の保存に関する推論
（5）運動メカニスムとしての記憶と真の記憶の関係の見直し
［A］身体の記憶と真の記憶との相互支援関係
［B］人の性格や知性の発達と二つの記憶の関係
［C］二つの記憶からの眠りや夢遊病の解明
［D］記憶の取り扱い方における二つの極点
（以上146号）
（6）純粋記憶の表出形式としての一般的想念の考察
［A］個別的記憶を包摂する一般的想念について
［B］ここでの考察の方針と目的の説示
［C］唯名論と概念論が一般的想念形成で直面する心理学的困難
［D］諸種類の区別に立脚する類似性の一般的想念の成立
（7）精神が純粋記憶を動的習慣の身体的記憶に入れる作用
［A］一般的想念の形成とその浮動的性質
［B］観念連合論による諸想念の相互的独立性理論の誤り
［C］意識の択一的選択のための財産目録としての純粋記憶
［D］連接性に基づく知覚と記憶との択一的観念連合の特質
［E］精神による諸記憶の過去における連接的位置付け
（8）精神の「知性的均衡」のための身体の役割
［A］精神と記憶の現在の行為への適用可能性の要件
［B］身体の現実的作用の正常性と精神の安定と均衡の関係
［C］身体の感覚的運動の混乱と精神異常の関係
［D］脳が諸記憶を保持するとの理論の不可能性について
Ⅵ　諸様態（イマージュ）の境界と決定について
―知覚と物質。心神と身体―
（1）精神（心神）と物質の結合についての序論
［A］知覚と記憶の考察に基づく本問題の見通し
［B］本問題の解決に導く「延長」と「緊張」の理念の予告

（2）精神と物質の二元論に基づく純粋認識の解明
［A］二元論と相反する認識方法論および二元論が基礎とする方法論
［B］二元論が提唱する方法論の理論的前提
—時間における「持続」と運動における「動性」—
［C］直接的方法による純粋認識の理論
(以上147号)
（3）形象的認識との対比による直接的認識の正当性の確認
［A］運動の絶対的不可分性について
［B］「動性」として知覚される諸運動の現存
［C］諸物体の区別の人為性・物質一般の同一性
［D］物質の量としての振動と諸物体の性質の結び付き
（4）精神（心神）と物質が空間と時間の形式により結合する仕方
［A］自由な行為の前提となる純粋知覚を成立させる形式的諸条件
［B］諸物体の運動と我々の直接的知覚との関係の考察
［C］意識と物質および心神と物体の知覚における接触
Ⅶ　若干の経過的コメント
(以上148号)
4　著作「創造的進化」(1907年）の検討
Ⅰ　序　論
（1）「生」の進化論における知性的認識の限界
（2）「生」の理論と認識の理論の相互的批判に基づく進化論の構想
Ⅱ　「生」の進化について
—機械論と合目的論—
（1）「生」ある有機体と無機的物体の比較
［A］「生」ある我々にとっての時間持続・記憶・過去
［B］我々の「生」における変化と物的客体の変化との対比
［C］生きている物体を無機的な物体から区別する「個体性」
［D］「生」一般を無機的物体の変化として扱う機械論の批判
（2）「生」の進化に関する生物変移論の学問的位置付け
［A］諸々の種の年代記的継起の関係を対象とする生物進化論の性格
［B］生物進化論とは異なる進化の哲学の課題
（3）「生」の進化に対する機械論と目的原因論の不適合性の検証
［A］進化の解明に適合しない絶対的予見可能性に立つ理論
［B］目的原因論・合目的論からの進化に不適合な個別的理論の排除
［C］知性の概念を遠くまで広げる進化理論に固有な誤り
(以上149号)
（4）「生」の進化に関する適正な論証原則の提示

［A］「生」の進化の解明に無力な従来の認識論の批判的考察
［B］「生」の実在の総体を解明する論証原則の提示
（5）自説に基づく既存の進化理論の批判的検証
［A］「適応」理論の理論面からの批判
［B］実例に基づく「適応」理論の批判
（6）機械論と合目的論から「生」の飛躍の理論への移行
［A］新たな諸種を創出する「生」の飛躍
［B］眼の構造の複雑性と機能の単一性の解明の新たな方向性
［C］単一で不可分な運動とそれを限定する物質性
Ⅲ　「生」の進展における相違する諸方向性
―低活動性，知性，本能―
（1）進化の進行の諸線への分化とその研究方法
［A］分化の真に深い原因について
［B］分化する諸傾向の研究方法について
（2）進化の主要な方向としての植物と動物
［A］植物界と動物界の区別
［B］動物が有する動性のメカニズム
（以上150号）
（3）動物の進化のプロセスの概観
［A］予備的考察
―進化の力としての「生」一般とその諸結果との不調和―
［B］動物的「生」の隆盛を妨げる障碍に打ち勝つ進化のプロセス
［C］動物の進化において出現した大きな二つの進路
―脊椎動物門と節足動物類―
［D］脊椎動物門と節足動物類の「生」に内在する異なった力
―知性と本能―
（4）知性と本能の内部的構造（意識・認識）の観点からの対比的考察
［A］序論―意識と二つの種類の無意識の対比
［B］認識の所持と使用の仕方による本能と知性の相違
（5）無機的物質に向けられた知性による「生」に関する考察の限界
［A］諸関係を確立する知性に本質的な機能
［B］知性が「生」の進化を思惟しえないパラドクス
（6）機械論的な知性に対比される「生」に向けられた本能
［A］本能が「生」の有機体化・組織化で果たす役割
［B］進化論的生物学の本能に関する理論の不十分性
（以上本号）

4　著作「創造的進化」(1907年）の検討（承前）

Ⅲ　「生」の進展における相違する諸方向性（承前）
―低活動性，知性，本能―

（３）動物の進化のプロセスの概観

［A］予備的考察

―進化の力としての「生」一般とその諸結果との不調和―

（ａ）活性としての「生」一般と世界でのその現れが乖離する理由

著者は続いて，先に考察を予告していた（前掲（２）・［A］参照）もう一つの問題，人間の動物界の総体に対する関係について，解明を進めるのであるが，その前に忘れてはならない事柄として，特に動物界の進化で顕著な，敢然として進む不可視的な力としての「生」の進化と，しかしそれに通過される各々の種の循環的進化（相対的安定を描く進化）の不釣り合いが挙げられ，同時にしかし動物の観察からは，感動的な母性愛によって，「生」の本質が「生」を伝える運動の内に収まっているのを知りうることについて，こう指摘される。

しかし「生」のこの圧力（poussée）そのものに関しては，いくつかの明瞭化が不可欠である。それは，この「生」の進化が，常に新たな現在において，敢然として進む不可視的な力（作用）としてだけあり，そしてそれの有機体化された世界での現われ（「生」の進化の不可視的な作用に通過される種）の方は，種が自らに与えたはずの物質性のなすがままとなって，その力（作用）の仕事には全く不釣り合いな結果として残されるということである（それは，我々の各々が，自身において身をもって知りうる事実であり，我々の自由がそこから顕現する諸運動そのものにおいて，その自由は，もしそれが恒常的な努力によって更新されないならば，それを窒息させる生まれかけの諸習慣を作り出している)。「これらの不調和の深

い原因は，手の施しようのないリズムの相違に存している。「生」一般は，活性（mobilité）そのものである。「生」の特別な諸表示の方では，心ならずもでだけこの活性を受け入れ，そして恒常的にそれに遅れている。活性は常に敢然と進む。諸表示はその場で足踏みする必要があるだろう。進化一般は，できる限り直線においてなされるであろう。特別な各々の進化は，ある循環的プロセスである。過ぎ行く風によって舞い上げられた埃の諸々の渦のように，生きているものは「生」の大きなそよぎの高みにあって，それら自体のところで回っている。それゆえそれらは，相対的に安定していて，それらの形態の恒久性そのものが，ある運動の素描に過ぎないことをないがしろにして，我々がそれらを諸々の前進としてよりは，諸物として取り扱うほどによく不動性をまねさえする。しかし時折，それらを支えている見えないそよぎが，あるはかない出現において，我々の目に具体化する。我々はこの突然の天啓を，多数の動物の下で非常に顕著で非常に感動的でもあり，植物のその種子のための配慮においてまでも観察されうる，母性愛のいくつかの形態の前で，有する。何人かの人が，そこに「生」の大きな神秘を見たこの愛は，おそらくそれの秘密を我々に漏らすであろう。それは我々に，各世代がそれに続く世代へと傾けられているのを示す。それは我々に，生きている存在は，特にある通過の場であること，「生」の本質は「生」を伝える運動の内に収まっていることを，垣間見させる」(433)。

（b）最大の作用を目指す「生」と最小の努力を選ぶ種との対照

「「生」一般と，それが現れる諸形態のこの対照は，至る所で同じ性格を示す。「生」はできるだけ作用することを目指すが，しかし各種類は最も小さな努力の総和を与えるのを選ぶと，人は言いうるだろう。それの本質

(433)　Bergson, Évolution（注364参照）p.602 et suiv.

であるものにおいて見られた「生」は，即ち種から種への推移（後出の四つの方向での進化の線における種から種への創造的な推移―筆者）として見られた「生」は，常に大きくなる作用である。しかし「生」がそこを通過する種の各々は，それの安楽だけを目指す。それは最も少ない労苦を要求するものへと進む。それが採るであろう形態に充たされて，それは半睡に入り，そこで「生」の残余のほぼすべてを無視する。；それは，それを直接的に取り巻くものの最も容易な活用のために，自らを形成する。そのようにして，「生」がそれによってある新たな形態に進む作用と，この作用がそれによって描かれる作用とは，二つの異なったしばしば対立する運動である」。

この観点からは，「生」によって収められた成功として，古生物学や動物学が描く諸々の種は，常に不完全であるのが見出される。

「生きている諸形態は，定義そのものによって，生活力ある諸形態である。人が有機体の，それの存在条件への適応をいかなる仕方で説明するにせよ，この適応はその種が存続しているときから，必然的に十分である。この意味において，古生物学と動物学が描く相次的な諸種類の各々は，「生」によって収められたある成功であった。しかし，人が各種を，それをその道に配した運動に比較し，そしてもはやその種がそこに組み込まれた諸条件とではなく比較するときには，物事は全く別な側面をとる。しばしばこの運動は逸れたし，確かにまたしばしば，突然に止まった。；通過の場所でだけあるはずであったものが，最終目的地となった。この新たな観点からは，不成功が原則のように思われ，成功は例外的で常に不完全なように思われる。我々は，動物的「生」が入り込んだ四つの大きな方向の内で，二つ（後出の棘皮動物門と軟体動物類―筆者）は行き止まりへと導き，そして他の二つ（後出の節足動物類と脊椎動物門―筆者）に関しては，努力が一般的に結果に不釣り合いであるのを，見るであろう」(434)。

［B］動物的「生」の隆盛を妨げる障碍に打ち勝つ進化のプロセス

（a）初期の動物の堅い覆いに打ち勝つ動性への進化

著者は，この歴史の詳細を再構成するためには，諸記録が我々には欠けているが，我々はしかしながら，それの大きな諸線を見分けることができるとして，その説示に全力を傾ける。

「ある危険が，おそらく動物的「生」の隆盛を危うく止めるようなある障碍が，それらを見張っていた。人が初期の動物相に一瞥を与えるとき，衝撃を受けるについて禁じえないある特性が存在する。それは動物の多少とも堅いある覆い，それの運動を妨げ，そしてしばしばまた無力化させたはずのそのような覆いへの幽閉である。その時の軟体動物類は，今日のそれらよりも，より一般的にある貝殻を有していた。節足動物類一般が，ある甲皮を具えていた。；それは甲殻綱であった。最も古い魚類は，ある極度の堅さの骨の覆いを有していた。この一般的事実の解明は，我々は信ずる，柔らかな有機体の自らをできるだけ食べられえないものとすることで，お互いに対して身を守るある傾向に求められるべきである。各々の種は，それが自らを構成する行為において，それに最も都合の良いものへと進む。原初的な有機体の内であるいくつかが，（栄養摂取において―筆者）無機物でもって有機物を産出するのを放棄して，完全に作られた有機的諸物質を，既に植物的「生」へと導かれた有機体から得ることで，動物性へと向かったのと同様に，動物的諸種そのものの内から多くが，他の動物を犠牲にして生きるために手筈を整えた。動物である，即ち動的なある有機体は，実際に防御のない動物を探しに行き，植物と全く同様にそれを餌とするために，その動性を利用しうるだろう。そのようにして諸種類が動的にされればされるほど，おそらくそれらはお互いに対して，ますます貪欲にそして危険となった。そこからは，動物の世界を段々と高い動性にもたらす進

（434）　Bergson, Évolution（注364参照）p.604 et suiv.

展において，その動物界全体の突然の停止（防御の具えで動性がより以上には発展しえなくなる停止―筆者）が生ずるはずであった。；なぜなら，棘皮動物門の堅い皮膚と石灰質，軟体動物類の貝殻，甲殻綱の甲皮そして古い魚類の鱗状の堅い殻は，おそらく動物諸種類の敵の諸種類に対して身を守るある努力を，共通の起源としてもっていたからである。しかし，動物がその背後で安全に身を置いていた堅い殻は，動物をその運動において妨げ，そして時々はそれを不動にした。もし植物が，セルロースのある膜で自らを包むことで，（運動のための―筆者）意識を放棄したとすれば，ある城塞に，あるいはある甲冑に自らを閉じ込めた動物は，半睡へと余儀なくされる。今日なお，棘皮動物門およびまた軟体動物類が生きているのは，この低活動性においてである。節足動物類と脊椎動物門は，おそらく同様にそれに脅かされていた。それらはその低活動性を逃れ，「生」の最も高い諸形態の現在の開花は，この幸福な状況に由来している」(435)。

（b）魚類と昆虫類に顕著な動性を獲得するための進化

「実際に二つの方向において，人は「生」の運動への推進が，打ち勝つのを見る。魚類は，それらの鱗状の堅い殻を，鱗と取り代える。ずっと以前に，昆虫類はそれらもまたそれらの祖先を保護していた堅い殻を取り除かれて，現れていた。それらの防御の覆いの不十分さに，それらは双方で，それらをしてそれらの敵を逃れること，そしてまた攻撃をなすことも可能とする，出会いの場と時を選ぶようにしうる，敏捷さをもって代えた。我々が人間の武装の進化において観察するのは，同じ種類のある進展である。第一の運動は，自分のために隠れ家を探すことである。最上のことである第二の運動は，逃走のために，そして殊に攻撃のために，できるだけしなやかとなることである。―攻撃することは，身を守る最も有効な手段

(435)　Bergson, Évolution（注364参照）p.605 et suiv.

でもある。かくして，重装備の装甲歩兵は，軍団の兵士により取って代わられ，甲冑に身を固めた騎士はそれの運動について，自由な歩兵に場を譲らなければならなかったし，そしてあるより一般的な仕方で，人間社会の進化と同様に，個人的運命の進化と同様に，「生」の総体の進化においては，最も大きなリスクを受け入れたもの達のために，最も大きな勝利があったのである。

動物のよく了解されている利益は，より動的になることであった。我々がそれを，適応一般に関していったように，人は諸種の変遷をそれらの特別な利益で，常に説明しうるであろう。人はそのようにして，変移の直接的原因を与えるであろう。しかし，人はしばしば，それの最も皮相な原因を与えるであろう。深い原因なのは，推進力，植物と動物の間に分けさせた世界に，「生」を放った推進力，動物性を形態の柔軟性に導いた世界に，「生」を放った推進力，ある瞬間にまどろむことに脅かされていた動物界において，少なくともいくつかの点に関して，人が目覚めること，人が果敢に前に進むことを達成した世界に，「生」を放った推進力である」(436)。

［C］動物の進化において出現した大きな二つの進路
—脊椎動物門と節足動物類—

（a）感覚運動神経組織からの脊椎動物門と節足動物類の区別

先に初期の動物にあった堅い覆いの障碍を逃れて，低活動性から動性への進化をなし，「生」の最も高い諸形態に至った種への系列として，節足動物類と脊椎動物門が挙げられていた（前掲（［B］・（a）参照）。その発展において，これら二つの進路は，いかにして分化したのかが，次に問われる。：脊椎動物門と節足動物類が別々に進化した二つの道上で，それらがなした発展（寄生あるいは他のすべての原因に結ばれる後退は捨象し

（436）　Bergson, Évolution（注364参照）p.606 et suiv.

て）は，何よりもまず感覚運動神経組織（脳脊髄の神経組織とそれが伸びる感覚的諸器官，およびそれが統御する運動性諸筋肉）の進展から成っていた。人は動性を求め，人はしなやかさを求め，人は運動の多様性を求める。しかしこの探求そのものは，異なった諸方向においてなされた。節足動物類の神経組織と，脊椎動物門のそれに与える一瞥が，我々に諸々の差異を知らせる。第一のものの下では，身体は並置された環節の多少とも長いひとつづきで形成されている。動的活動はその際には，付属肢の間に，それの各々がそれの特別性をもつ，変わりうる数の，ときには相当の数の付属肢の間に分配される。他方のものの下では，その活動は二対の肢のみに集中されて，そしてこれらの器官はそれらの形態にずっと緊密にではなく依拠している諸機能を果たす。その形態からの器官の機能の独立性は，人間の下で完全であり，それの手はどんな仕事でも実行しうる(437)。

（b）「生」に内在する二つの力の確定の試み

「そこに，人が見るものがある。人が見るものの背後には，人が推察するものがいまや存在する，「生」に内在する二つの力，そして最初は混合されているが，増大するにつれて分かれたはずの二つの力が存在する。

これらの力を定義するためには，節足動物類の進化と脊椎動物門のそれにおいて，双方で頂点を印す種類を考察する必要がある。この点を，いかに確定するのか？ここでも，もし人が幾何学的正確さを目指すならば，人は道を間違えるであろう。人がある同じ進化の線上で，ある種類が他の種類よりもより進んでいると承認しうるただ一つの単純な徴表も，存在しない。それらの間で比較し，そして各々の特定の場合において検討して，それらがいかなる点まで本質的なのかあるいは偶然的なのか，そしていかなる範囲でそれらを考慮する必要があるのかを知る必要のある，複数の形質

(437)　Bergson, Évolution（注364参照）p.607 et suiv.

が存在する。

例えば，成功は優越の最も一般的な基準であり，二つの用語はある点まで互いに同義語であるのは，疑いがない。生物が問題であるときには，成功によって，最も多様な環境で，障碍のできるだけ大きな多様性を通して，土地のできるだけ広い範囲を覆う仕方で発展するある適性を理解する必要がある。陸地全体を領地として要求するある種類は，真に支配的で従ってまた優越しているある種類である。そのようなものは，脊椎動物門の頂点を表すであろう人間種である。しかし，体節動物の系列において，昆虫類そして特にいくつかの膜翅目もまた，そのようなものである。人は，人間が陸地の地上の主人であるように，蟻は陸地の地下の主人であるといった。

他方で，後期に現れた一団の種類は，退化したものの一団でもありうるのだが，しかしそのことのためには，退化のある特別な原因が，介在する必要がある。法上（あるべきこととしては―筆者）は，このグループはそれがそこから由来するグループに優越しているであろう（「生」の推進力である意識が，そこから由来するグループに優越するグループとして創造しているであろう―筆者）。なぜならそれは，（同一系列内での―筆者）進化のより進んだある段階に，対応しているからである。ところで人間は，おそらく脊椎動物門の最後に到来したものであるだろう。そして昆虫の系統においては，膜翅目以後では，鱗翅目だけが，即ちおそらく退化したもののある種類（退化の特別な原因が介在したある種類―筆者），開花植物の真の寄生虫だけが存在する。

そのようにして，異なった道によって，我々は同じ結論に導かれる。脊椎動物門の進化が人間でもって頂点に達したように，節足動物類はその頂点に，昆虫でもって，特に膜翅目でもって達したであろう。もし人が，本能は昆虫の世界とは別のいかなるところにでも，かくも発達しなかったことに，そして膜翅目の下で以外のいかなる昆虫グループでも，本能がかくも素晴らしくはないことに，注目するのなら，人は動物界の進化のすべて

が，植物的「生」への退化を捨象すれば，二つの異なった道で行われ，その一つは本能へと進み，他は知性へと進んだといいうるであろう」(438)。

［D］脊椎動物門と節足動物類の「生」に内在する異なった力
—知性と本能—

（a）相違する二つの進化の線の観点からの考察

α　同じ傾向の継続的な段階とする学説の批判

ベルクソンが提唱する「生」の進化は，ある最初の運動に従って，終わりなく続けられるある創造であり，そして最初には共通であった束としての諸傾向が，次第に分化する道を進むというものであった。そしてこれまで，その分化の大きな線は，まず低活動性（不動性）の傾向をもつ植物と，動性を傾向としてもつ動物に分岐してきたことが，それらの補完性と対立に焦点を合わせて詳論されてきた。続いてここからは，更に動物の線において，昆虫がその頂点として創造された，本能を傾向としてもつ節足動物類と，人間がその頂点として創造された，知性を傾向としてもつ脊椎動物門とが，いかなる補完性と対立において，分岐してきたかを論証しようとするのであるが，著者はその考察に入る前に，多くの自然の哲学を損なってきたと評価する，アリストテレス以来の誤りとそこに陥る理由を指摘する。その誤りとは，植物的「生」，本能的「生」，合理的「生」において，それが増大するにつれて分かれたある活動の異なった三つの方向（系列）であるのにもかかわらず，発展するある同じ傾向の継続的な三つの段階を見ることである（Bergson, Évolution（注364）参照 p.609.）。既になされてきた植物と動物の各々の傾向の差異の検討を基礎として，これから本格的に考察される本能と知性の差異を中心に，まずどうしてそのような誤りに陥るのかについて，自らの進化の理論に手掛かりを求めながら，論ずる。

---

(438)　Bergson, Évolution（注364参照）p.608 et suiv.

「しかしまず最初に，どうして人は，現実にはそれは同一の序列のものではなく，互いに継続しあうのでも，人がそれらにランクを割り当てうるのでもないものなのに，二つの活動（知性と本能―筆者）を，その第一のものは第二のものに優越し，そして重なり合うであろう諸活動を，そこに見る気にさせられるのかをいおう。

それは，互いに浸透して始まる知性と本能が，それらの共通の起源のあるものを，保持しているということである。それらのどちらも，純粋状態では出会われない。我々は植物において，それの下で眠っている動物の意識と動性が目覚めうること，そして動物は植物的「生」への誘導の恒常的な脅威の下にあることを言った。植物と動物の二つの傾向は，初めにはそれらの間に，決して完全な亀裂が存在しなかったほどによく，浸透し合っていた。：一方が他方に，とりつき続けている。；至る所で我々は，それらが混ざり合っているのを見出す。異なっているのは比率である。知性と本能についても，同様である。人が本能の痕跡を見出さない知性も，特に知性のある外縁に取り巻かれていない本能も存在しない。多くの誤解の原因であったのが，この知性の外縁である。本能が常に多かれ少なかれ知性的であるということから，人は知性と本能が同じ序列のものであること，それらの間には複雑性と完全性上の差異だけがあること，そして殊に二つの内の一つが，他のものの用語で言い表しうると結論した。現実にはそれらは，補完し合うがゆえにだけ相伴い，そしてそれらはそれらが異なっているがゆえにだけ補完し合うのであり，本能の内に存在する本能上のものは，知性の内にある知性上のものの反対方向にある」(439)。

β　自説が採る知性と本能の対比的説明の必要性

もちろん，著者がここにこのような誤りを指摘した目的は，従来の自然

---

(439)　Bergson, Évolution（注364参照）p.609 et suiv.

の哲学を批判することだけではなかった。むしろ，これから説く知性と本能という進化の方向について，それらには単なる程度の差があるだけでなく，それらが混じり合うとしても比率において優勢になってゆく，そして補完的ではあっても対立する傾向となってゆく，大きな線であることを論証することの難しさ（前出の植物と動物の区別より以上の難しさ）について，予告する意図があったと思われる。実際にこの後に続く文章では，かかる難しさのゆえに，この区別の考察では現実の「生」を離れて，顕著な印象に依拠せざるをえず，その帰結としてこの狭い方法からは定義にも似た客観的区別をなしうる利点がある反面，現実の「生」における双方の不確定や相互浸透からのぼかしを無視するであろうが，このおぼろげな主題には，明るい光に向けての最初の努力が不可欠であり，そしてそれがなされた後には，その訂正が容易であるだろうとの趣旨の，弁明がなされている。

「最初に，我々がなすであろう諸区別は，余りに際立っていること，その理由はあらゆる知性が本能に浸透されているごとく，あらゆる具体的本能は知性が混ぜられているのに，我々は本能によって，それがもつ本能的なものを，知性によって，それがもつ知性的なものを定義しようと意図しているからであることをいおう。加えて，知性も本能も，定義に適さない；それは傾向なのであり，作られたものではない。最後に，現在の章（本小論ではⅢ）において，我々はそれらを，その行程に沿って配する（現実の―筆者）「生」を離れて，知性と本能を考察するであろう点について，忘れてはならないであろう。ところで，ある有機体によって表される「生」は，我々の目には無機的な物質から，あるものを獲得するための努力である。それゆえ，本能と知性において，我々に強い印象を与えるのはこの努力の相違であるとしても，そしてもし我々がこれら二つの心的活動の形態に，なによりもまず不活性な物質に対する作用の異なった二つの方法を見るとしても，人は驚かないであろう。それらを考察する少し狭いこ

の仕方は，我々にそれらを区別する客観的なある手段を与える利点があるだろう。反対にその仕方は我々に，知性一般のそして本能一般の，それら二つともが恒常的にそれの上と下とに揺れ動いている中庸の位置（区別するための位置―筆者）だけを与えるであろう。それが，人は引き続くところにおいて，知性と本能の各々の輪郭が，必要である以上に際立っているところの，そして我々が同時にそれらの各々の不確定と，それらの相互的侵食から生ずるぼかしを無視したであろうところの，ある図式的素描だけを見る理由である。かくもおぼろげなある主題において，人は光に向けての努力を，いくらしてもし過ぎることはないであろう。続いてより不明確な諸形態を与え，その図式がもつであろう余りに幾何学的なものを訂正して，最後にある図式の硬直性に，「生」の柔軟性を代置することは，常に容易であるだろう」(440)。

そこで次には，知性と混じり合っている本能において，優勢的傾向となろうとする本能的なものと，知性において同様なものを，現実的な「生」の行程を離れて，人間と昆虫という限界事例（完成事例）を中心に探求しようとするのであるが，ここでも多少の先回りをすれば，それら二つの傾向はおおよそ以下のように区別される：脊椎動物門の分化した大きな線において，優勢に創造的進化を推進している傾向としての知性は，「生」の具体的場面で，過去の経験に基づき目的・手段の秩序に意識的に（臨機応変に）適合して活動できる力である；節足動物類に分化した大きな線において，優勢に創造的進化を推進している傾向としての本能は，常に定められた目的のために，定められた手段によって完全に活動しうる力である。そして昆虫において完成した本能は，有機体化された諸手段を利用し，構築さえする能力であり，人間において完成した知性は，無機的な諸手段を作製し，使用する能力である。

（440）　Bergson, Évolution（注364参照）p.610 et suiv.

γ　限界事例（完成事例）である人間と昆虫による対比的説示

まず知性に関する限界事例（完成事例）である人間を中心に，この点が説示されるが，その概要を記したい。：人間が，目的・手段の秩序に意識的に適合して活動しうる知性を示したのは，ムーラン・キニョンの石切り場での，道具として製作された斧によってであるだろう。それは，過去の経験に基づいた，道具を作るという活動の，発明であるだろう。そして脊椎動物門に属する動物は，道具は作らないまでも，過去の経験に基づいて現在の活動（身体の一部を道具とする活動）を臨機応変に発明することで，知性に推進されての進化をなしてきたといいうる。そのようにして，目的・手段の秩序に臨機応変に適合する動物の知性が，ある理想として目指すのは，道具を作りうる人間知性である。もし我々が，我々の種を定義するために，歴史と前史が人間と知性の恒常的な特性として提示するものに，厳格に依拠するとすれば，我々はおそらく homo sapiens（賢明な人間）ではなく，homo faber（巧みな人間）というであろう。

続いて，本能に関する限界事例（完成事例）である昆虫を中心に，その力がおおよそ次のように示される。：大部分の本能は有機体化の作業そのものの延長，あるいはより良く完了である。本能の活動はどこに始まるのか？自然の活動は，どこで終わるのか？人はそれを，言うことはできないであろう。幼虫から若虫へのそして完全昆虫への変態，しばしば幼虫の側から，適切な進み方とある種のイニシアチブを要求する変態においては，動物の本能と生きている物質の有機体化する作業との間の，明確な境界線は存在しない。人は随意に本能が，それが役立てるだろうところの諸手段を有機体化すると，あるいは生きている物質の有機体化がその器官を利用するはずの本能に伸びると，いいうるであろう。昆虫の最も素晴らしい諸本能は，それの特別な構造を運動に発展させることだけをなし，その程度は社会的「生」が諸個体の間に仕事を分け，そしてそれらにそのようにして異なった本能を書き入れているところで，人はそれに相応する構造上の

差異を観察するほどである。人は蟻の，蜜蜂の，スズメバチの，そしていくつかの旧翅類の多様性（polymorphisme）を知っている。

かくして，人間と昆虫という限界事例においての，知性と本能の（明確過ぎる）区別が，図式的に素描される。

「そのようにして，人が知性と本能の完全な勝利に立ち会う，限界事例だけを考察するならば，人はそれらの間にある本質的な差異を見出す。完成した本能は，有機体化された諸手段を利用し，構築さえする能力である；完成した知性は，無機的な諸手段を作製し，使用する能力である。これら二つの活動態様の，利点と不都合は一目瞭然である。本能は，その届く範囲に適切な手段を見出す。この自らを作り自らを修繕する手段は，自然の他のすべての産物と同様に，無限な細部の複雑性と見事な機能の単純性とを示すが，それがなすように求められているものを，すぐに，望まれた瞬間に，しばしば驚くべき完全さでなす。逆にそれは，ほとんど不変なある構造を保持し，その理由はそれの変更は種の変更なしには，進まないからである。それゆえ本能は，必然的に特殊化されていて，定められたある目的のための，定められたある手段の利用であるに過ぎない。反対に，知性的に製作された手段は，不完全な手段である。それは，努力を代償としてだけ，得られる。それはほとんど常に，骨の折れる操作である。しかしそれは，無機的な物質で作られるから，任意の形態をとりうるし，どんな使用にも役だち，浮上するすべての困難からその生きている存在を助け出して，それにまた無限な数の力を与える。直接的な必要について，自然な手段に劣っているそれは，その必要がより差し迫っていなければ，それだけ自然な手段よりもより多くの利点を有している。特に知性は，それを作成した存在物の自然（nature de l’être）に逆に作用する。なぜなら知性は，この存在物の自然に新たな機能を行使するように促して，その自然に，自然な有機体を延ばす人為的なある器官である，いわばより豊かなある組織化を与えるからである。それが満足させた必要ごとに，それは新たな必

要を生じさせ，そしてそのようにして本能のごとく動物が自動的に動くであろう活動の圏を閉じる代わりに，それはこの活動に，それが活動を益々遠くに推し進め，そして活動を益々自由にするところのある場を開く。しかしこの知性の本能に対する利点は，遅くにだけ，そしてその作製をそれのより高い程度の力に至らせた知性が，既に作製のための諸機械を作製するときにだけ，現れる。初めには，作製された手段と自然な手段の利点と不都合は，非常に良く均衡していて，二つの内のどちらが生きている存在に，自然に対するより大きな影響力を確保するか，いうのが困難なほどである」(441)。

δ　知性と本能の推測しうる分化のプロセス

そこから，これら二つの心的活動の進化の様相を，推測しうる。初期の知性と本能は，それらが支配するには至らないある物質に幽閉されている。もし「生」に内在的な力が無限な力であるのなら，それはおそらく同じ諸有機体において，本能と知性を無際限に発展させたであろう。しかし二つを同時に発展させる力は尽きて，この力は，選ぶ必要が生じた。ところでこの力には，無機的な物質に対して作用する，二つの仕方の間での選択権がある。それは，それがそれでもって働くところの，ある有機体化された手段を自らのために作って，直接にこの作用（例えば営巣活動における無機的物質への作用）を供しうる。あるいはまたそれは，要求される手段を自然に手に入れる代わりに，無機的物質を加工して，それを自ら作製するであろうある有機体に，間接的にこの作用を与えうる。そこから，発展するにつれて段々と別異となるが，しかし事実お互いから決して分かれあわない知性と本能が生ずる。実際に一方で，昆虫の最も完全な本能は，構築の場所と時と材料だけであるにせよ，いくつかの知性の微光を伴う。とき

(441)　Bergson, Évolution（注364参照）p.611 et suiv.

たま，蜜蜂が野ざらしで，営巣するとき，それらはこれらの新たな状況に適応するために，新しく真に知性的な仕掛けを発明する。しかし他方で知性は，本能が知性をよりも，なお多く本能を必要とする。なぜなら，自然なままの物質を加工することは，既にその動物の下で，その動物が本能の羽ばたきに基づいてだけ自らを高めえた，ある上級な程度の有機体化を前提としているからである。そのうえに，自然は節足動物類の下では，躊躇わずに本能へと進化した一方で，我々はほとんどすべての脊椎動物門の下では，知性の開花よりはむしろ探求に立ち会う。それらの心的活動の基体を形成しているのはなお本能であり，しかしそれに取って代わろうと切望する知性がそこにある。人間以前の脊椎動物の知性は諸手段を，発明するには至らない。少なくとも知性は，それがなしで済ませたいと望んでいるところの本能に実は基づいて，できるだけ多くの変化を行うことで，諸手段の発明に努める。知性は事実，人間の下でだけ知性それ自体を手中にし，そしてこの勝利は，人間がその敵に対して，寒さに対して，飢えに対して防御するために保持する，自然な諸手段の不十分さそのものによって，顕現する。この不十分さは，人がそれの意味を解読しようと努めるとき，ある前史的記録の価値を獲得する。この勝利こそ，本能が知性から受け取る最終的解雇である。それでもなお，自然は心的活動の二つの態様の間で，躊躇したはずであるのは事実である。一方は，直接の成功が保証されているが，それの効果において限定されており，他方は射倖的であるが，しかしもしそれが独立性に至るとすれば，それの得るものは無限に広がりえた。他方でここでも，最も大きな成功は，最も大きなリスクがあった側（知性の側）からもたらされた。本能と知性はそれゆえ，「生」における目的と手段という全く同一の問題の，等しく優美な二つの異なった解決を提示する(442)。

（442）　Bergson, Évolution（注364参照）p.615 et suiv.

（4）知性と本能の内部的構造（意識・認識）の観点からの対比的考察

［A］序論―意識と二つの種類の無意識の対比

ベルクソンの理論によれば，互いに浸透して始まる知性と本能は，それらの共通の起源である意識全体のあるものをなお保持し続けながら，しかし分化していった異なる二つの傾向なのであり，その帰結として純粋状態では出会われない性質のものであった（前掲（3）・［D］・（a）・α参照）。すると，これからなされる意識（ここでは行為における意識が直接の問題なのであり，「生」の推進力としての意識ではない）という内部構造に基づく相違を，強調する目的での考察にあっても，本能には意識が全く欠けており，知性には意識が存在するという断絶的な区別は，認める余地のない議論となるだろう。そこで，これからの考究においてそのような不合理な議論に進むことなく意識面での正当な区別を論ずるために，最初に行為と意識の有無との関係をめぐる明解な説示が，抜かりなくなされる。

（a）　無の意識と無力化されている意識の区別

植物は，後に言及されるように本能はあるが，しかし感情に伴われていないから，この面での意識は無いだろうし，節足動物類にも無意識である本能をいわなければならない。著者はここで，余りにも注目されていない，二つの種類の無意識の間のある差異に，注意を促す。それは，無の意識と，無効化されている意識とのそれである。「落下する石の無意識は，無の意識である。：石はその降下について，いかなる感情も有していない。本能が無意識である極端な場合における，本能の無意識についても同様であろうか？我々がある習慣的行為を，機械的になすとき，夢遊病者が機械的に彼の夢に興ずるとき，無意識は絶対的でありうる。しかしここにおいて，無意識は，その行為の表象が行為そのものの―表象に非常に完全に相似していて，もはやいかなる意識もこぼれえないほどにそこに非常に正確に嵌め込まれている行為そのものの―履行によって妨げられていることに由来

している。表象が，行為によって妨げられている。それの証明は，もし行為の成就がある障碍によって止められ，妨げられるという場合に（例えば習慣的な行為の履行が妨げられる場合に―筆者），意識が浮上するということである。それゆえ意識はそこにあった，しかしその表象を充たす行為によって，無力化されていたのである」。

こうして，無意識な本能が言われるときにも，それは意識が全くないのではなく，自動的に履行される行為によって，表象や感情の意識に対応して行為するという空白がなくされることで，ただ妨げられているだけだとされ，その結果として共通の起源から，知性と共に意識を受け取っているのであるが，本能はその意識の成立が行為の自動的な履行によって妨げられる傾向として分かれていったとする，妥当な位置付けがなされうることとなった(443)。

（b）　行為と意識との関係の正当な位置付け

するとここでの意識の意義は，自ずと明らかとなる。「この点を深めることで，人は意識が（以下に述べるごとく―筆者），生物によって有効に成し遂げられる行為を取り巻く，可能的行為あるいは潜在的活動のゾーンに内在的な光であるのを見出すであろう。意識は躊躇い，あるいは選択を意味している。多くの同様に可能的な行為が，現実の行為なしに素描されるところ（結論に達していないある熟慮におけるように）では，意識は強烈である。現実の行為が唯一の可能的な行為であるところ（夢遊病的あるいはより一般に自動的な種類の行為においてのごとく）では，意識は無となる。それでもなお，もし人はこの最後の場合において，ある体系化された運動の総体―それの最後のものは最初のものにおいて，既に前成されているところの―を見出し，そして他方でそれの意識は，ある（その運動の

（443）　Bergson, Évolution（注364参照）p.616 et suiv.

総体を止める―筆者）障碍の衝撃で，姿を現すことが証明されるのであれば，この最後の場合において表象と認識は存在している。この観点から人は，生物の意識を，潜在的活動性と現実的活動性の間の，ある算術的差異と定義するであろう。それは，表象と行為との間の隔たりを測定する」(444)。

（c）　本能と知性における意識の機能の相違

それゆえ当然ながら，知性は意識に向かい，本能はいまの意味での無意識に向けられるであろう。なぜなら，扱う手段が自然によって（身体の一部として）有機体化され，適用点が自然によって与えられ，得るべき結果が自然によって望まれているところでは，ある微かな部分が選択に残されるのだからである。ここでは表象の意識が現れようと目指せば目指すほど，それの対象となっている行為の自動的な成就によって拮抗される関係となり，表象がまずあって行為がまだなされていないがゆえに生ずる不足の意識は，ただ何かの障碍によって本能が完遂されなかったという，偶然的な場合にしかそもそも考えることができない。従って本能においては，意識は本質的に，本能の最初の進行だけを，即ち自動的な諸運動の連続全体を，発動するそれだけが際立つ。

これに対し，人間が限界事例（到達点）である知性の発達においては，不足は知性の通常的状態であり，諸障碍を受けることは，それの本質そのものである。無機的な諸手段の作製を根源的な機能としてもつ知性は，千の諸困難を通じて，この仕事のために，場所と時と，形態と物質・素材とを選ぶ。そしてそれは，完全に満足することはできず，その理由はあらゆる新たな満足が，新たな必要を生じさせるからである。

要するに，もし本能と知性の双方が，諸認識を発展させるとすれば，その認識は本能の場合には，ただ発動されるのを待つ享受されている無意識

---

(444)　Bergson, Évolution（注364参照）p.617 et suiv.

的なそれであり，知性の場合には反対に，表象によって手段と目的の秩序に対応しようとする，考えられそして意識的な認識となる。しかしそれらは，性質のであるよりはむしろ程度の差（主要な傾向上での差）である(445)。

［B］認識の所持と使用の仕方による本能と知性の相違

本能も知性も，所持している認識を使用する作用であるが，第一のものはその認識を，無意識的に享受して，それを自動的に発動するのに対し，第二のものはその認識に，必要としているものの獲得についての，意識して考える作用そのものによって達する。この相違は，心理学的に意識にかかわっているだけのときには，目をつぶりうるほどのものに思われ，本質的な差異に到達するためには，互いに深く異なっているそれら二つの認識の客体に，真っすぐに進む必要がある。著者はこの観点からの対照を，豊富な知識に基づいて，鮮明に描き出す。

（a）本能が生来的に享有する認識の客体

「ウマバエ（Œstre du cheval）は，その動物の脚の上や肩の上にその卵を産み付けるとき，それはそれの幼虫がその馬の胃において発育するはずであるのを，そして馬は自分の体をなめながら，その発生する幼虫をそれの消化管に運ぶのを，知っているかのようにして行動する。麻痺力のある膜翅目昆虫は，それの犠牲となるものの，神経諸中枢のある正確な点を，それを死なせることなく不動にさせる仕方で攻撃するとき，熟達した外科医を兼ねたある賢明な昆虫学者がなすごとくに行う。更に，人がそれの歴史を，かなりしばしば物語った小さなコガネムシ（Scarabée），ツチハンミョウ（Sitaris）が，何を知るはずなどないというのだろうか？この鞘翅

(445)　Bergson, Évolution（注364参照）p.618.

目昆虫は，蜜蜂の一種である毛足花蜂（Anthophore）が穿つ地下の回廊の入口に，その卵を産み付ける。ツチハンミョウの幼虫は，長い待機の後に，その回廊の出口でオスの毛足花蜂を待ち伏せし，それにしがみつき，婚姻飛行（vol nuptial）までそれに付着したままでいる。そこにおいて，それは，オスからメスに移る機会を捉え，メスがその卵を産むのを静かに待つ。その産卵のときにそれは，蜂蜜の中でそれに支えの役をするであろう卵に飛び付いて，数日かけてその卵を食べ，そして殻に収められてそれの最初の変態を受ける。いまや蜂蜜の上に浮かぶために装備されて，それはこの食料の備えを消費し，そして蛹となり，次に完全な昆虫となる。すべてがあたかも，ツチハンミョウの幼虫がその孵化以後に，オスの毛足花蜂が最初に回廊から出てくるであろうことを知り，婚姻飛行がそれにメスへと移る手段を提供するであろうことを知り，それが変態するであろうときには，それを養いうる蜂蜜のある房へと，そのメスが導いてくれているであろうのを知り，この変態までは，毛足花蜂の卵を，自らを養うように，蜂蜜の表面に自らを支えるように，そしてまたその卵から出てくるであろうライバルを排除するように，少しずつその卵を食べるだろうことを知ってゆくかのように，経過する。そしてすべては同様に，ツチハンミョウそれ自体が，それの幼虫がこれらの物事のすべてを知ってゆくだろうと知っているかのように経過する。認識は，もし認識が存在するとすれば，暗黙的である。それは意識において内部化する代わりに，正確な進行において外部化する。そうではあっても，その昆虫の行動が，空間と時間の正確な点において存在しあるいは生ずる，特定された諸事物の表象を素描すること，その昆虫がそれらを学んでいるのでなしに，知ることは，事実である」(446)。

こうして，本能が生来的に有している認識の客体は，特定された諸事物

---

(446)　Bergson, Évolution（注364参照）p.618 et suiv.

そのものであることが，明らかとされた。これに対して知性が生来的に有している認識の対象は，諸事物を考えるために必要な諸関係であることが，次に明らかとされる。

（b）知性が生来的に有している認識の対象

「ところで，もし我々が同じ観点から知性を考察する場合に，我々はそれもまたそれらを学んでいることなしにある物事について，認識するのを見出す。しかしそれは，確かに（本能の場合とは―筆者）異なったある序列での諸認識である。我々はここでは，生得性に関する哲学者の古い論争を，再度扱うのは望まないであろう。それゆえ我々は，すべての人が一致する点を確認することに，即ち小さな子供は動物が理解しない物事を，直接に理解すること，この意味において知性は本能と同様に，生来的に発する遺伝的な機能であることを，確認するのにとどめる。しかしこの生来的な知性は，それが認識するある能力であるにせよ，いかなる特定的な客体も知らない。新生児が最初に，授乳者の乳房を探して，そのようにしてそれが決して見たことのないあるものの（おそらく無意識的な）認識をもつのを示すとき，人は正にその生来的認識がここでは，ある特定された客体であるという理由で，それは本能であって，知性ではないというであろう。それゆえ知性は，いかなる客体の生来的認識ももたらさない。しかしながらまた，もし知性が何も自然的には認識しないとすれば，それは生来的な何ものも持たないということであろう。それゆえすべての事物を知らないそれは，何を認識しうるのだろうか？―諸事物の他に，諸関係が存在する。生まれたばかりの子供は，（生来的な知性によって―筆者）特定の諸客体も，いかなる客体のある属性も認識しない。；しかし，人がその子の前で，ある客体にある属性を，ある実詞・substantif（名詞―筆者）にある形容詞をあてはめるであろう日に，彼はすぐにそのことの意味するところを理解するだろう。それゆえ主語と属詞・attribut（述語―筆者）の関係は，

彼によって自然に把握されている。そして人は，動詞が表現している一般的関係について，言葉がそれを暗黙に示しうるほどに―動詞をもたない原初的諸言語で生ずるように―精神によって直接的に想定されている関係について，同様に言うであろう。それゆえ知性は，ある主語，ある属詞，ある動詞―表現されたあるいは暗黙に示された―が存在するすべての分節が含むところの，同等なものの同等なものに対する，含まれているものの含んでいるものに対する，原因の結果に対する等々の関係を，自然に使用している。人は知性がこれらの特別な諸関係の各々の，生来的認識を，有しているといいうるのだろうか？それがそれだけの還元しえない関係であるのか，それとも人はなおより一般的な関係に，それらを解消しうるのかを探求するのは，論理学者の仕事である。しかし人が，思惟の分析をいかなる仕方でなすのであれ，人は常に精神がその自然な使用をなすがゆえに，精神がそれの生来的な認識を所持しているところの，一つあるいは複数の一般的枠組みに到達するであろう。それゆえに，もし人が本能と知性において，それらが生来的認識について含んでいるものを考察すれば，人はこの生来的認識が，第一の場合には諸事物を対象とし，第二の場合には諸関係を対象とするのを，見出すであろうといおう」(447)。

（c）本能と知性が依拠している認識の形式

こうしてこれまで，本能と知性の相違が鮮明にされてきたのであるが，しかしそこにはベルクソンの進化の理論にとって，新たな課題が登場する。それは哲学が問題とする認識の実質と形式の区別が，そしてベルクソンも承認しているその区別が，本能と知性の認識の客体と正確に対応しているのかどうかという点である。というのも，もし対応しているとすれば，認識の実質といえる諸事物を生来的な認識の対象としている本能と，認識の

(447)　Bergson, Évolution（注364参照）p.619 et suiv.

形式といえる諸関係を生来的な認識の対象としている知性とは，絶対的に異なるものなのであって，双方が共通の起源から分かれた傾向として，共通に有するはずのものを完全に否定するように強いられるはずだからである。そこで著者は，本能が認識の対象としているのは，ここに何々があるとの，認識の実質である客体の実在を必ず含む，認識の形式で判断されるものであるのに対し，知性が認識の対象としているのは，もし諸条件がこのようであれば，条件付けられたものは，このようである，とだけいう認識の形式で判断されるものであるとの論証を，加えてこれら二つの認識の形式は，「生」一般のために有用に行為する手段にかかわる認識として，進化の最初において浸透し合っていた（共通性を有していた）ものが，増大するにつれて分化するに至ったものであるとの論証を，要約するところ以下のようになす。

哲学者達は，我々の認識の実質と，それの形式を区別する。実質は，自然なままの状態で理解される知覚諸能力により，与えられえるものである。形式は，ある体系的な認識を構成するために，これらの実質の間で確立される諸関係の総体である。実質のない形式は，既にある認識の客体でありうるか？おそらくこの認識が，所持されるあるものであるよりは，付けられるある習慣に，より類似していることを条件として，ある状態にであるよりはある方向に，より類似していることを条件として，然りである。それは，注意の自然なある習慣である。人が彼にある分数を書きとらせるだろうのを知っている小学生は，分子と分母であろうものを知る前に，ある棒線を引く。；彼はそれゆえ，二つの項のいかなるものも知らないが，精神にそれらの間の一般的関係を提示した。彼は実質のない形式を知っている。我々の経験がそこに挿入されるに至る，あらゆる経験以前の枠組みについても同様である(448)。それゆえここでは，その用法によって承認され

(448)　この著作の少なくとも主要な目標の一つは，カントが我々の認識の形式について，それが先験的悟性概念であるとした論証を，ベルクソンは進化によって，人

る用語を採用しよう。我々は知性と本能の間の区別について，より正確な次の公式を与えるであろう。：それが生来的に有しているものにおける知性は，ある形式の認識であり，本能はある実質の認識を含む形式による認識である。

認識のそれであり，行為のではない実質と形式の観点からは（動物に「生」一般を有らしめている原初的意識がなすはずの認識における実質と形式の観点からであり，後に進化した動物がその実質と形式に関して，実際にどんな認識の仕方に基づいて行為するようになったかの観点からではないときには)，「生」一般に内在的な認識の力はなおある限定された一つの原則としてあり，そこには，最初はどちらも「生」一般に有用な認識の力であるとの共通性が存することから，対立してさえいるはずの二つの認識の仕方が，なお共存し，相互に浸透しえていた。第一のものは，特定された諸客体に，それらの物質性において，直接的に達する。それはいう，「ここに何々がある（ここに何々であるものやことがある—筆者)」(voici ce qui est)。第二のものは，いかなる特定的な客体にも達しない。それは，ある客体をある客体に，ある部分をある部分に，ある側面をある側面に関係付けて，人が諸前提を所持している場合には結論を引き出し，そして人が学んだものから人が知らないものへと進むための，自然なある力であるに過ぎない。それはもはや「ここにある」をいわない。それは，もし諸条件がこのようであれば，条件付けられたものは，このようであるとだけいう。本能的認識は，この第一の性質を有し，哲学者が断定的命題と呼称するものにおいて定式化され（ただしカントのいう断定的判断はここで言われているものとは内容的に異なり，永続性を有する時間の形式において，量について不変な物質・実体が，各時点においてもつ変化とは，それの状

間が既に生来的に（経験の実質を知る以前に）有することとなった認識という角度から，証明しようとすることであるのを，これらの文章はまず明らかにしていると思われる（後掲（5)・[A]・[B] 参照)。

態・偶有性についてだけのそれでありうるという関係―それゆえ知性・悟性が有するところの認識の実質を含まないあくまで形式的な―即ち主語と述語の関係の判断であることに注意する必要がある―坂本「構想（１）」（前掲注１参照）207頁以下），他方で知性的認識は，第二の性質を有し，常に仮定的に表現される。これらの能力の内で，第一のものは初めには確かに第二のものよりも好ましい。そしてそれは，もしそれがある無限な数の客体に及ぶとすれば，実際にそうであるだろう。しかし実際には，それはある特別な客体，そしてまたこの客体の制限された部分に以外には，決して適用されない。第二のものは反対に，本性的に中身のない認識である。しかし，そのことそのものによって，ある無限な客体が代わる代わる，そこに場所を見出しうるであろうある枠組みをもたらす利点がある。

すべては，生きている諸形態を通じて進化する力が，限定されたある力が，自然なあるいは生来の認識の領域において，二つの種類での限定の間で選択権を有するかのごとくに経過する。第一の場合において，認識は充実して十分でありうるだろうが，しかしその場合にはある特定の客体に制限されるであろう。；第二の場合には，それはもはやそれの客体を限定しないが，しかしそれが理由で，それはもはや何も含まない，実質のない形式に過ぎなくなる。最初にお互いの内に含まれていたそれら二つの傾向は，増大するために分かれなければならなかったはずである。それらは，各々がそれの側で，世界において運を試しに進んだ。それらは本能と知性に到達した。人は身を置くのが認識の観点であって，もはや行為のではない場合に（知性と本能が認識の面からみてどんな意義を有するかの観点であって，後に進化した動物がそれらをどのように行使するかの観点ではない場合に），知性と本能とがそれによって定義されるべきであろう，認識の相違する二つの態様は，それゆえそのようなものである。しかし認識と行為は，ここでは全く同一な能力の二つの側面であるに過ぎない。そしてその観点から，二つの認識の態様を考えるときには，実際に共に「生」のため

に行為する手段にかかわる認識として，第二の定義（認識の実質と形式の観点からの本能と知性の定義[449]）は第一の定義（行為との関係という観点からの本能と知性の定義[450]）のある新しい形式に過ぎないのを見るのは容易である（後掲（５）・［A］・（ａ）参照）[451]。

（５）無機的物質に向けられた知性による「生」に関する考察の限界

［A］諸関係を確立する知性に本質的な機能

こうして，本書の考究は，これまでの分析を基礎として，諸客体の諸状態を，空間に投影した象徴的な時間において並置し，それら諸状態間の諸関係を考察するという，我々の知性（純粋悟性）による認識は，何かの実用性から考え出された相対的な認識方法というべきであり，その枠を超ええない知性は，そのままでは「生」の進化を認識しえないとする，核心的論点に進むに至る（前掲注366参照）。そしてこの点は，カント形而上学との関係性を考えるうえでも，先触れともいうべき位置を占める。そこで長くなるが，その叙述を，できるだけ忠実に辿りたい。

（ａ）知性の形式的認識が本能の実質的認識に優る諸点

本能が，とりわけて自己の身体の一部として有機体化された，自然なあ

---

(449)　先にはこの観点からの定義はこう言われていた：「第一のもの（本能―筆者）は，特定された諸客体に，それらの物質性において，直接的に達する。それはいう，『ここに何々がある（ここに何々であるものやことがある―筆者）』(voici ce qui est)。第二のもの（知性―筆者）は，いかなる特定的な客体にも達しない。それは，ある客体をある客体に，ある部分をある部分に，ある側面をある側面に関係付けて，人が諸前提を所持している場合には結論を引き出し，そして人が学んだものから人が知らないものへと進むための，自然なある力であるに過ぎない」（本項）。

(450)　先にはこの観点からの定義はこう言われていた：「完成した本能は，有機体化された諸手段を利用し，構築さえする能力である；完成した知性は，無機的な諸手段を作製し，使用する能力である」（前掲（３）・［D］・（ａ）・γ）。

(451)　Bergson, Évolution（注364参照）p.621 et suiv.

る手段を利用する能力であるのなら，それはこの手段とそしてそれが適用される客体とについての認識（事実，潜在的なあるいは無意識的な）を包含しているはずである。しかし知性は，無機的な，即ち人為的・加工的な諸手段を作製する能力である。もし自然が，知性によって生きている存在に，その作製能力に役立つであろう有機体化された手段を与えるについて放棄するとすれば，それは生きている存在が諸状況に従って，その作製に変化をつけうるためである。知性の本質的機能はそれゆえ，何かある諸状況において，自力でやりくりする手段を識別することであるだろうし，それは最も役立ちうる，即ち示されている枠組みに最もよく組み込まれうるものを探すであろう。それは本質的に，与えられた状況とそれを利用する諸手段の間の諸関係を対象としている。それがもつ生来的なもの，それは諸関係を確立する傾向である。活動が作製の方向に向けられているところでは，認識はそれゆえ必然的に諸関係を対象とする。しかし知性のこの全く形式的な認識は，本能の実質的な認識に対して，計り知れない利点を有している。ある形式は，正にそれが空虚であるがゆえに，随意に無限な数の事物によって，なんの役にも立たない事物によっても，代わる代わる充たされうる。その結果として，ある形式的認識は，それが世界にその出現をなしたのが実践的有用性のためであるとしても，実践的に有用であるものに限定されない。ある知性的存在は，それ自体を超越する（無機的物質だけではなく，どんな種類の客体をも言葉から成る想念・考えとなしうる自らの作用に気付き，それを実行しようとする―後掲［B］・（d）・β参照）ために必要なものを，自らにもたらす。

（b）本能と知性の相違についての新たな定式の提示

しかしながら，知性的存在はそれがそう望むよりも少なく，それがそう想像するよりもまたより少なく，自分を超える。知性の純粋に形式的な性格が，思索のためにより強力な利益に属するであろう諸客体（実質として

の諸客体）に身を置くために必要であろう安定（lest）を，それから奪う。反対に，本能は望まれる実質性を有するが，しかしそれはかくも先にその客体を探しに行くことはできない。：それは思索しない。我々は，我々の現在の考究に最も関係する点に触れている。我々が示すであろう本能と知性の間の能力における相違は，我々の全分析が引き出そうと目指していたそれである。我々はそれを次のように定式化するだろう：知性のみが探求することのできる，しかしそれがそれ自体によっては決して見出さないであろう諸事物そのものが存在する。これらの事物は，本能のみがそれを直接的に見出すであろう。；しかしそれは，決してそれらを探求しないだろう[452]。

（c）知性が確立する諸関係の性質の確定

我々は，知性には諸関係を確立する機能が，あるといった。より正確に，知性が確立する諸関係の性質を確定しよう。この点に関しては，人が知性（悟性）に純粋思索に充てられるある能力を見ている限り，なお曖昧さの内に，専断の内にある。その際には，人は悟性の一般的な枠組みを，―私がそれは何かを知らないが―，しかし絶対的な，他に還元しえない，説明しえないものとして理解することに帰着する。悟性は，我々が各々，我々の顔立ちを伴って生まれるごとくに，天からその形式を伴って，降りたであろう。人はこの形式をおそらく定義するが，しかしそれは人のなしうる

---

(452)　Bergson, Évolution（注364参照）p.622 et suiv. 知性が有している認識は，もし諸条件がこのようであれば，条件付けられたものはこのようであるとの形式に依拠する能力であるから，それはあくまでも探求することだけをなし，生来的に諸事物があるのを既に認識している事情により，それらを見出すまでは不可能である。これに対し本能は，ここに何々があるとの実質を含む形式に依拠する能力であるから，知性とは異なり諸事物があるのを既に生来的に認識していて，それに基づいてそれらを直接的に見出しうるが，しかし生来的に探究のための認識形式ではありえない。

ことのすべてであり，そして何ゆえにそれが他のものではなくむしろそれであるのか，探求する必要はないこととなろう（実際には，知性の生来的な認識の対象は諸関係であるが，しかしそれらの認識枠組みは天から持ち来たらされたのではなく，この地上での進化において分離して獲得されてきた能力である―詳細は後掲［B］参照）。

かくして人は，知性は本質的に統一であると，それのすべての作用は共通の目的として，諸現象の雑多性にある種の統一を導くことである等々と，教えるだろう(453)。しかし第一に，「統一」の用語は，「関係」のそれ，あるいは更に「思惟」のそれよりもより不明確であり，それについてより以上にはいわないものである。加えて人は，知性は統一するよりもなお多く，区分する機能を有しないのだろうかどうかを問いうるだろう。最後に，も

---

(453)　ここで批判の対象とされている，「悟性の枠組みや悟性による統一」は，おそらく本小論の冒頭に大要を既に掲げた（前掲２・Ⅰ参照），カントのカテゴリー（思惟形式）の理論，およびそれに基づく，悟性による雑然たる諸知覚の綜合的統一の理論を指していると思われる。そこで後者の理論についてだけ，その大要をここに示したい：悟性が雑然たる諸知覚を思惟するためには，まずそれらを空間の形式に従って諸表象として受容しなければならず，更にはそのように受容された諸表象が，時間の形式に従う経験的意識（内感）に結ばれることにより，我々の内的状態に属さなければならない。そして自発性としての悟性は，この経験的意識（内感）に依拠して，対象から諸表象を受容したところの我々（我々の内的状態）―即ちいかなる表象をどのように受容したか―についての内的現象を生じさせ，それによって間接的に我々によって受容された外的現象について把捉する可能性を持たなければならない。こうして我々はまず諸知覚を雑然たる諸表象として受容する必要があり，そのためには経験的意識（内感・内的知覚能力）は，その受容の形式である時間によって，必要ならば一瞬一瞬に受容した諸表象をどこまでも区別しえなければならず，この点では必要ならば空間の形式に従い場所ごとにどこまでも区別しうる外感（外的知覚能力）と同様である。そうすると，我々の対象認識にあっては，雑然たる諸表象の結合と結合根拠が不可欠であり，さもなければどんな表象も同一性ある対象とすることができない。この結合が正に，悟性がカテゴリーの結合根拠に基づいてなす，綜合的統一なのである。それゆえ，感性における諸表象はすべて，カテゴリーのどれかが指定する結合形式によって規定され，対象として認識されることになる（坂本「構想（２）」（前掲注１参照）318頁以下参照）。

し知性はそれが統一するのを欲するがゆえになすというように振舞うのだとすれば，そして単にそれが統一を必要としているから統一に努めるとすれば，我々の認識は精神の諸要求に，おそらくそれらはそうであるのとは別でもありえたであろう諸要求に，相関するものとなるはずである。別異に態様付けられた知性に対しては，認識は別異でありえたであろう。知性はもはや，何ものにも掛けられていない。逆にすべてがその際には，知性に掛けられている。そしてそのようにして，悟性を余りに高く置くために，人はそれが我々に与える認識を，余りに低きに置く。この認識は，知性がある種の絶対であるときから，知性に条件付けられた相対的なものと，それゆえそれ自体で絶対的ではないものとなる。反対に我々は，知性を行為の，諸必要に相関するものとしてみなす（行為することの諸必要が，知性という認識能力を，そしてその能力が有する認識形式を，進化において成立させたとみなす)。行為を設定せよ，知性の形式そのものは，そこから導かれる。この形式はそれゆえ，他に還元しえないものでも，説明しえないものでもない。そしてそれは，正に独立的ではないがゆえに，人はもはや認識はその形式に依拠しているとはいいえない。認識は，ある意味で実在性の構成要素となるために，もはや知性のある産物であるのを止める。

しかし知性の形式は行為から導かれるとのいまの説明に対しては，哲学者からのこんな反論が考えられる：行為は秩序付けられたある世界でなされ，そしてこの秩序は既に知性による思惟に属しているのだから，我々の知性は行為のためにあると説明するのは，論点先取りの虚偽を犯している。もし本能との関係で知性を際立させて理解するという，現在の章（本小論ではⅢ）において身を置く観点が，我々の最終的な観点であるべきだとすれば，この反論は正当であるだろう。しかし最終的な観点であるところの，哲学はいかなる点まで，いかなる方法でもって，物質と同時の知性の真の発生を，確かめうるのかを知る問題（知性を生成させた根拠を知る問題）は，次の章（本小論ではⅣ）のために，留保する。当面その準備として，

我々が従事するのは，心理学的方面に属する。我々は，我々の知性が特別に適合している物的世界の部分は，いかなるものかを問う（後掲［B］・（a）以下参照）。ところで，この問題に答えるためには，哲学のある体系を選択する必要は，なんらない。常識の観点に，身を置くことで十分である(454)。

［B］知性が「生」の進化を思惟しえないパラドクス

知性は，「生」の進化が共通の起源（創造的飛躍の推進力である意識）から分化させてきた一つの傾向であり，人間を限界事例（到達点）として生成させてきた能力であった。これから著者は，そのようにして人間において完全なまでに生成してきた知性（純粋悟性）が，（そのままでは）実際にはその「生」の進化を思惟するためには，全く不適切であるというパラドクスを，常識の観点に身を置きながら説示しようとするのであるが，その懇切さは著者自身がそこまでは必要なかったかもしれないと，後に言及するほどである。おそらく，著者に不必要にも思われるほどの順を追っての説明の懇切さは，以下の論証が，カントのカテゴリー論と悟性による綜合的統一の理論（前掲［A］・（c），注453および次号掲載後掲Ⅳ・（2）・［A］・（b），154号掲載後掲Ⅴ・（7）参照）の批判ともなる困難な企て（より直接には，知性・悟性の能力一般の，「生」とその進化を解明するについての限界を示すという困難な企て）であることの意識に由来しているであろう。それだけに，著者のここでの説示の紹介では，あまり長くはならないように，しかし省いてはならないところを残すという方針に依拠したいが，実際にはほとんど省きえない次第ともなろう。

（a）知性が作用の客体とする固体の性質

最初に，既に確認されているように，我々の知性が，作製することを目

(454)　Bergson, Évolution（注364参照）p.623 et suiv.

指す傾向としてあることから，無機的物質を，しかも固体を，作用の主要な客体とする事情が示される。：行為から出発し，そして知性は第一に，作製することを目指すとの，原則に立とう。作製はもっぱら無機的な物質に対して行使され，その内でも，それは固体以外にはほとんど保持しない。残余は，その流動性そのものによって，避けられる。

無機的な物質（特に固体）の，最も一般的な特性とは，いかなるものか？それは広げられ，それは他の諸客体に外的な諸客体を，そして，これらの諸客体においては，諸部分に対して外的な諸部分を我々に表す。おそらく，各客体は諸部分に可分であると，各部分がさらに我々の空想において可分であると，そして無限においてそうであると考えることは，我々の後の取扱い（解体と再組成）のために，我々に有用である（後掲（c）参照)。しかし，我々にとって現在の取扱いのために何よりも必要であるのは，我々が携わっている現実的な客体を，あるいは我々がその客体をそれへと分解した現実的諸要素を，暫定的に最終的である（provisoirement défimitif）とみなし，そしてそれらをそれだけの単位として取り扱うことである。要するに，我々に実際に現実的なものとして現れ，我々の注意を確定するものは，常に一度選択された非連続性の態様である。なぜなら，我々の現在の行為が調整されるのは，それに対してだからである。我々は我々が物的な広がりの継続性について話すときに，我々に気に入るだけ多く，我々に気に入るように物質を解体する可能性に言及している。；しかし，この継続性は後に我々がそれを見るように，我々にとっての物質が我々に残すところの，我々がそれに見出すであろう非連続性の態様を選ぶ権能に帰される。そのようにして，非連続性はそれ自体のために思惟され，それ自体において思惟可能であり，我々はそれを我々の精神の積極的な行為によって表象するのに対し，継続性の知性的な表象はむしろ消極的であり，基本において，現在与えられている何かあるシステムの前での，我々の精神のそれを唯一可能的なものとみなすことの拒否にすぎない。知性は

非連続的なものだけを，明確に表象する。

（b）知性が運動を並置する不動性において表象する理由

次に，我々の知性は，運動する客体において，その運動を，並置する諸々の不動性で表象する理由が説かれる。：他方で，我々の行為が行使される諸客体は，動的な客体であるが，しかし我々にとって大切なのは，その動的なものがどこに行き，何かある瞬間にその行程のどこにあるかを知ることであり，それがある位置から他のある位置に移るところの前進，運動そのものである前進ではない。我々がなす，そして体系化された運動である諸行為において，我々が我々の精神をその上に固定するのは，その運動の目的あるいは意義，それの総体上の素描，一言でいえば不動的な行程の見取図に対してである。その動性そのものから，我々の知性は顔をそむけ，その理由はそれに専心することに，知性はいかなる利益も持たないからである。もし知性が，純粋理論に充てられているとすれば，それが自らを据えるのは運動においてであり，その理由は運動がおそらく現実そのものであり，そして不動性は外観的で相対的で以外のものでは決してないからである。しかし知性は，全く別なものに充てられる。それは自らに強制しない限り，それは反対の進行に従う。それは常に不動性から出発し，あたかもそれが究極的現実あるいは要素であるかのようにそうする。；それが運動を表象しようと望むときには，それが並置する諸々の不動性でもって，その運動を再構築する。我々が思索的方面でのそれの不正性と危険性を示すであろうこの操作（それは行き止まりに導き，解きがたい哲学的諸問題を人為的に作り出す）は，人がそれの用途に照らすとき，容易に正当化される。知性は，自然な状態では，実践的に有用なある目的を目指す。それが運動に，並置された不動性を代置するとき，それはその運動があるように再構成するとは主張しない。それは単に，運動を実践的な等価物によって置き換える。哲学者が思索の領域に，行為のために作られた思惟の

ある方法を移すとき，誤っているのは彼らなのである。しかし我々は後に，この点に立ち戻るつもりである。さしあたりは，我々の知性がその自然な素養に従って専心するのは，安定的なものと不動的なものであるということに限定しよう。我々の知性は，不動なものだけを，明確に表象する[455]。

（c）我々の知性がもつ無機的物質の解体と再組成の能力

すると知性にとっては，物質の総体が随意に裁断し縫い直す素材として現れ，そしてその無限の解体と再組成の能力を象徴するのが空間である。

いまや，作製するとは，ある物質においてある客体の形態を，裁断することから成る。何よりも大切なこと，それは得るべき形態である。物質に関しては，人は最も適切なものを選ぶ。しかしそれを選ぶためには，即ち多くの他のものの内からそれを探しに行くためには，少なくとも想像において，あらゆる種類の物質に，考えられている客体の形態を，与えるように試みた必要がある。換言すれば，作製することを目指す知性は，決して事物の現在の形態に止まらない，それを最終的とは考えない，反対にあらゆる物質を，随意に裁断可能とみなすのが知性である。プラトンは，良き弁証家を，動物の骨を砕くことなく，自然によりかたどられた諸関節に従って切断する，腕のよい料理人に比較している。常にそのようにして，自然によりかたどられた諸関節に従って切断する知性は，確かに実際に，思索の方に向けられた知性であるだろう。しかし行為は，特に作製は，反対の精神の傾向を要求する。物質の総体が，我々の行為のための思惟には，我々が望むであろう物を裁断して，それを我々に気に入るであろうように縫い直す，ある巨大な素材として現れるはずであろう。ついでにこう注記しよう：ある空間が，即ち同質的で，そして空虚で，無限で，無限に分割しうるどんな態様の解体にも無差別に適するある場（milieu）が，存在す

（455）　Bergson, Évolution（注364参照）p.625 et suiv.

るというとき，我々が肯定しているのは，この解体と再組成の力である。この種のある場は，決して知覚されない。；それは，考えられるだけである。知覚されているもの，それは色づけられた，抵抗する，現実の諸物体，あるいはそれらの基礎的な現実的諸部分の諸輪郭が描く諸線に従って分けられている，広がりである。しかし，我々が物質に対する我々の力を，それを我々に気に入るように解体し再組成する我々の能力を表象するとき，我々はこれらの解体と再組成のすべてをまとめて，現実の広がりの背後に，それを支えるであろう同質で，空虚で，そして無差別な空間の形式の下に，投影する。それゆえこの空間は，事物に対する我々の可能的行為の図式―それら事物は，我々がより先で解明するように，この種のある図式に入る自然な傾向をもっているのだが―である（なお前掲３・Ⅵ・（３）・［Ｃ］参照）。ゆえに同質的で無限に分割しうる空間は，ある精神の見方である。動物が，我々と同様に広げられた事物を知覚するときでも，動物はそれらのいかなる考えも，おそらくもたない。それは人間の知性の，作製的傾向を象徴するある表象である。

（ｄ）　人間知性の認識客体を拡大させる社会的「生」と言語

更に，人間の知性の検討に不可欠な，社会的「生」が考慮され，そしてそこでの言語の役割が説かれる。

α　知性に基づいている我々の社会の特性および言語の役割

我々は，人間の知性の本質的特徴のいくつかを，列挙した。しかし我々は，社会的「生」を考慮することなしに，孤立した状態での個人を取り上げた。現実には人間は，社会で生きる存在である。もし人間の知性は，作製するのを目指しているのが事実であるとすれば，それはそのことのために，また残余のことのために，他の知性と調和している事情を付け加える必要がある。ところで，それの構成員が彼らの間で諸徴表によって通じ合っていないある社会を，想定するのは困難である。昆虫の諸社会は，お

そらくある言語をもち，そしてこの言語は人間のそれと同様に，共同での「生」の必要に，適合させられているはずである。ある共同の行為が，可能となる必要がある。しかし共同の行為のこれらの必要は，ある蟻塚にとってと人間のある社会にとってとでは，同じでは全くない。昆虫の諸社会においては，一般的に多形性（polymorphisme）が存在し，分業が自然的であり，そして各個体はそれがなす役割に，それの構造によって固定されている。ともかくも，これらの社会は，本能に基礎を置いており，その結果としてまた，多かれ少なかれ諸器官の形態に結ばれた，いくつかの行為と作製に基礎を置いている。それゆえ，例えばもし蟻が，ある言語をもつとすれば，この言語を構成する徴表は，確かに特定された数において存し，そしてそれらの各々は，一度その種のものが構成されると，ずっと不変にある客体あるいはある作用に結び付けられたままのはずである。徴表は，それで示されるものに，密着している。

反対に人間のある社会においては，作製と行為は変わりうる形態に属し，そして加えて各個人はそれの役割を学ぶはずであり，そこでは彼の構造によって役割が予定されていない。それゆえあらゆる瞬間に，各個人がその新たな役割をもつために，人が知っていることから人が知らないことへと移るのを可能とする，ある言語を必要とする。それの徴表—それそのものは無限な数において存しえない—が，事物のある無限性に拡張可能であるところの，ある言語を必要とする。徴表の，ある客体からある他の客体に移るかかる傾向は，人間の言語に特徴的なものである。人はそれを，小さな子供が喋り始める日から，彼の下で観察する。すぐに，そして自然に，彼が習う言葉の意味を拡大し，人が彼の前である客体に結び付けた徴表を切り離して，他のところに移動するために，最も偶然的な比較あるいは最も遠い類推を利用する。人がこの傾向を一般化の能力と一緒にするのは，間違っていた。動物それ自体が一般化するし，ゆえにまたある徴表は，それが本能的であるにせよ，常に多かれ少なかれある一般化された種類

(genre) を表示している。人間の言語の諸徴表を特徴付けているもの，それはそれらの一般性というよりは，むしろそれらの動性である。本能的徴表は，密着的徴表であり，知性的徴表は，動的徴表である。

β　言語を通じての知性の適用領域の拡大

この言語の動性を通じて，知性はそれが適用されるべき領域を，自ずと拡大してゆく。そして自らが考えの創造者として，表象一般の能力であると気付いた日から，知性は単にそれが自然的に影響する無機的な物質だけでなく，更にまた「生」の思惟をも包含することを望む。

ところで，それらがあるものから他のものへと進むために適した言葉のこの動性は，それら言語が諸事物から諸理念に広がることを可能とする。確かに言語は，内に自らを閉じ込めえない外に向けられる知性に，熟考する能力を与えたであろう。熟考するある知性は，実践的に有用な努力の他に，費やすべきある余剰の力をもっていた知性である。それは既に潜在的に，自己自身の上に自己を奪回している意識である。言語は，多いに知性を解放するのに，寄与した。あるものから他のあるものへと進むために作られた言葉は，実際に本質的に移行しうるもので，そして自由である。それゆえ言葉は，単に知覚されたあるものから知覚された他のあるものへだけではなく，更にまた知覚されたものからこのものの記憶に，即ち想念・考えへと，広がりうる（前掲３・Ｖ・(６）参照)。そのようにして，外を眺めていた知性の目に，内的世界の全体が，それに固有な作用（どんな種類の客体をも言葉から成る想念・考えとなしうる作用）の光景が，開かれるであろう。

他方で，知性はこの機会を待っていた。知性は，言葉がそれ自体で，言葉に支えられて，自らに固有な仕事の内部に，入り込むためのあるものであることを利用する。知性が自らの進行を省察して，それ自体が想念・考えの創始者として，表象一般の能力として気付いた日から，それがそれの

想念・考えをもつのを望まないというような客体―それが実践的行為と直接的な関係なしであるにせよ―は存在しない。実際に知性のみが，理論に配慮しうる。そしてそれの理論は，すべてを包含することを，単にそれが自然的に影響する無機的な物質だけでなく，更にまた「生」と思惟（pensée）をも包含するように望むであろう（知性は「生」と思惟を，無機的物質について理解してきたのと同様な仕方に基づいて，理解あるいは実行しようと望むであろう―次項γ参照)。

γ　拡大された客体に知性がそれの諸習慣を適用する不都合

しかし，知性がこの最後の問題（「生」と思惟の問題）に取り組む仕方は，形態を通じてその区別と明晰性に達するという，無機的物質を扱うときの習慣に従うものとなると推察しうる。

いかなる手段でもって，いかなる道具でもって，最後にいかなる方法でもって，それはこれらの問題に取り組むのか，我々はその点を推察することができる。元々は，知性は無機的な物質の形態に，適合されている。知性にその作用の範囲を広げうるようにした言語は，事物を示すために，そしてただ事物だけを示すために，作られている。知性が遅かれ早かれ，言語が何ものの上にも置かれていないのに，それを中途で手に取り，物ではないそしてそれまで隠されていて，影から光へと移るための言葉の救けを待っていたある客体に適用されるはずであったのは，偏に言葉が動的であるがゆえに，それがあるものからある他のものへと進むがゆえにだけなのである。しかし知性の作用の範囲を広げさせた言葉は，この客体を覆うことで，それをまた知性に本来的な物に変える。そのようにして知性は，それがもはや無機的な物質に対して作用を及ぼすのではないときでも，この作用において付いた諸習慣に従う。：その習慣は，無機的物質のそれである諸形態を，適用する。知性はこの種の仕事のために作られている。この種の仕事のみが，それを十分に満足させる。そしてそれが，知性はそのよ

うにしてのみ，区別と明晰性に達するということで，知性が表現するものである[456]。

（ｅ）知性が無機的物質に幾何学と論理学を適用する理由

そのような知性は，純粋持続としての時間に対応した不可分な広がりとしての空間（前掲３・Ⅵ・（２）参照）における客体（生成・創造され続けている全宇宙の構成要素としての客体）のような，具体的な事物の純然たる様態（イマージュ）である知覚よりも，互いに外的な諸概念によって，より扱うのが容易な象徴へと向かい，そして象徴の取扱に適した幾何学と論理学を物質に適用している。しかしそれらの学で適用されうる純粋推論は，その物質に対する以外の領域では，常識に従ってその使用が監視される必要がある。その点がおおよそ以下のように論述される。

知性はそれゆえ，「生」の推進力である意識の内で自己の能力そのものを，明晰にそして区別して考えるために，非連続性の形式の下にある自己に気付くはずであろう。諸概念は実際に，幾何学的空間における諸客体のごとく，互いに外的である。そしてそれら概念は，それらがそれを模範に作り出されたところの諸客体と，同じ安定性をもつ。それらは集められて，知性の本質的性格により，諸固体の世界に類似する「英知的世界」を構成するが，しかしそのようにして構成された世界の諸要素は，知性にとっては具体的な事物の純然たる様態（イマージュ）よりも，より軽快で，より澄み切っており，より扱うのが容易なものである。実際に，それら概念はもはや事物の知覚そのものではなく，知性がそれによって事物の上に自己を固定する行為の表象である。それらはもはや，諸様態（イマージュ）ではなく，諸々の象徴である。我々の論理学は，この象徴（概念）の取扱において，従わなければならない規則の総体である。これらの象徴（事物の

（456）　Bergson, Évolution（注364参照）p.627 et suiv.

知覚そのものではない）は，固体の考察に由来しているのであり，これらの象徴の間の組成の諸規則は，固体間の最も一般的な関係をほとんど表しただけであるから，我々の論理学は，諸物体の固体性を客体として採用する科学，即ち幾何学において勝利する。我々がすぐ先で見るであろうように，論理学と幾何学はお互いを生じさせ合う。自然論理学が生じたのは，諸固体の一般的で，直接的に見出される諸特性によって思い付かされた，ある種の自然幾何学からである。今度は，諸固体の外的諸特性の認識を無限に延長する科学的幾何学が生じたのは，この自然論理学からである。幾何学と論理学は，厳格に物質に適用されうる。しかしこの領域の外では，純粋推論は全く別なものである常識によって，監視される必要がある。

（ｆ）知性は有機体化されたものを無機的なものに解消する

無機的な物質を行為の道具として作製するために，それの自然な諸進行を利用している我々の知性は，有機体化されたものを無機的なものに解消するから，「生」の創造的進化を考えることができない。

そのようにして，知性の基礎的諸力のすべては，無機的物質を行為の道具に，言葉の語源的意味において器官に，変形させることを目指している。諸有機体を生じさせることで満足しない「生」は，それら有機体に付属物として，生物の才覚・能力（industrie）により，ある巨大な器官に変ずる無機的物質そのものを与えようとするであろう。「生」が最初に知性に割り当てる努めは，そのようなものである。それが，知性はなお不変に，あたかもそれが不活性な物質の凝視に魅惑されているかのように，振る舞う理由である。そこから，それが生きているものの方へと方向を変え，そして有機体化に直面するときの，それの驚きはそこから生ずる。その際にはそれが何をするにせよ，有機体化されたものを無機的なものに解消する。なぜならそれは，それの自然な方向を反転させることなしには，そして自分の上で身をよじることなしには，真の継続性を，現実の動性を，相互的

な浸透を，要するに「生」であるこの創造的進化を，考ええないだろうからである[457]。

（g）知性は連続性ある動性としての進化を認識しえない

かくして知性は（そのままでは），より一般的に，原因と結果が一体的に進行し，結果が原因を確定している面をも併せ持つ発明や創造（前掲２・Ｖ・（３）・［Ｂ］，注413参照）を，そしてまた新たな現在において新たな自己を生成・創造し続ける「生」を，認識できないように作られているといいうる。

我々は空間において分けるのと同様に，時間において確定する。知性はその言葉の固有の意味において，進化を思惟するためには，即ち動性であるだろうある変化の連続性を思惟するためには，なんら作られていない（結局のところ知性は，連続性ある変化を，区別しうる各瞬間における不変な状態の並置・確定によって，再構成することしかできない）。我々はここでは，この点を強調しないであろう，それは特別なある章で深めるつもりである。単に，知性は生成を，一連なりの諸状態として表象することをいおう。我々の注意は，これら状態における一つの内的変化に向けるように求められるか？素早く我々は，その一つの内的変化を，集められてそれの変更を構成する，ある別な連なりの諸状態に解体する。これらの新たな諸状態そのものは，各々不変であるだろう，あるいはその際にそれらの内的変化が我々を捉えるとしても，まもなくある不変な諸状態の新たな連なりに解体し，そして無限にそのように続く。ここでも，思惟することは再構成することから成り，そして当然にも我々が再構成するのは，所与の諸要素，従って安定した諸要素でもってであろう。その結果として，我々は我々の付加の無限な進行によって，生成の動性を作り，我々は模倣しうる

（457）　Bergson, Évolution（注364参照）p.631 et suiv.

が，しかし生成そのものは我々がそれを保持していると信じるときには，我々の指の間に滑り込むであろう。正に知性は，常に再構成することに，そして所与のもので再構成することに努めるがゆえに，知性はある歴史の各々の瞬間で存在する新しいものを，逃れさせる。それは不予見的なものを認めない。それはあらゆる創造を排斥する。特定の先行諸事象が，ある特定の結果を，それらと相関する計算可能な結果を導くということ，我々の知性を満足させるものはそこにある。ある特定された目的が，それを達成するために特定の手段を呼び起こすということ，我々はその点も理解する。これら二つの場合において，我々は知られているものでもって組成される知られているものに，要するに繰り返される旧いものに携わっている。我々の知性はそこで，安楽なのである。そして客体がいかなるものであれ，もしそれが必要なら知性は，その客体そのものに，事物がそこではそのように経過するであろうおおよその等価物を，代置するように，抽象し，分離し，その代置に適さないものを排除するであろう。しかし，各瞬時はある供給（apport）であるということ，新しいものが絶えず湧出するということ，ある形態が，おそらくそれについては，一度生じたなら，人がそれはそれの原因によって特定されたある結果であるというだろうが，しかしそれについては予見されていたと仮定するのが不可能であり，その理由はここではそれらの種類において独自な諸原因が，結果の一部をなしていて，結果と同時に実現し始め，そしてそれらがそれを確定するのと同じだけ，結果によって確定されている，そのような諸原因と結果の一体となる形態が生ずるということである（前掲２・Ｖ・（３）・［Ｂ］，注413参照）；それらは，我々が我々において感じうる，そして我々の外で共感（sympathie）によって推察するあることであるが，しかし知性（純粋悟性）の用語で表現しえないし，言葉の狭い意味で，思惟しえないあることである。人は，我々の知性の用途を考えてみるならば，その点に驚かないであろう。それが探求し至る所で見出す因果性は，我々が無限に同じものを全く同じ

諸要素で再組成する，我々が同じ結果を得るために同じ諸運動を繰り返す，我々の才覚・能力のメカニスムそのものを表している。我々の知性にとって，とりわけて目的は，人が予め与えられている模範に基づいて，即ち旧いあるいは知られている諸要素で構成された模範に基づいて働く。しかしながら，才覚・能力そのものが，それの出発点であるところのいわゆる発明に関しては，我々の知性はそれを，それの湧出においても，即ちそれがもつ不可分なものにおいても，それの一般性においても，即ちそれがもつ創造的なものにおいても，捉えるには至らない。その発明を説明することは，常にそれを，不予見的で新しいそれを，知られている，あるいは旧い，異なったある序列（原因と結果の序列）で配された諸要素に解体することから成る。知性は根本的な生成と同様に，完全な新奇性を認めない。それは，ここではまた，知性が「生」のある本質的側面を思惟するために，なんら作られていないかのように，逃れさせるということである。

（h）以上の分析からのまとめ

以上の知性についての分析が，こうまとめられる。

我々の分析のすべてが，我々をいまの結論へと導く。しかし，知性的作業のメカニスムに関して，かくも長い詳細に入る必要はなんらなかった。：それの諸帰結を考えるだけで，十分であるだろう。人は，不活性なものを扱うのに非常に長けている知性が，それが生きているものに関わるとすぐに暴露する，不手際を見るであろう。身体の「生」を扱うのが問題であれ，精神のそれを扱うのが問題であれ，知性はあるそのような用途に充てられていたのではないある道具の厳格性，硬直性，粗暴性をともなって，行動する。容易に人は，それの起源を，生きているものを不活性なものとして取り扱う我々の頑迷さに，あらゆる現実についてそれがどれほど流動的でも，最終的には止められた固体の形式で思惟する我々の頑迷さに，発見するであろう。我々は，非連続的なものにおいて，不動なものにおい

て，死んでいるものにおいて，安楽にいるのである。知性は，「生」の本性的無理解によって，特徴付けられる[458]。

（6）機械論的な知性に対比される「生」に向けられた本能

［A］本能が「生」の有機体化・組織化で果たす役割

しかし，知性の認識の限界に関する著者の分析は，これで終了したのではない。なおその点が，知性と分離した傾向としての本能との対比という観点から，更には「生」の形態そのものに合わされているこの本能を，知性に基づく科学が，それを全的に捉ええていない現実という観点から，なお詳細に入る説明が続けられる。これまでと同じ姿勢で紹介したい。

（a）物質の有機体化を継続する本能

最初に，本能は「生」が物質を有機体化する作業を，継続しているだけと見うる事情が示される。

知性とは反対に本能は，「生」の形態そのものに，型を合わせて作られている。知性はすべての事柄を機械論的に取り扱うのに対し，本能は，もし人がそう言いうるのであれば，有機体的に振る舞う。もし本能において眠っている意識（無効化されている意識―前掲（4）・［A］参照）が，目覚めるとしたら，もし本能が行為に外部化する代わりに，認識に内部化するとすれば，更にはもし我々が本能に問いかけでき，そして本能が答えうるとすれば，本能は我々に「生」の最も内奥の諸秘密を与えるであろう。なぜなら本能は，我々がそのことを確かにしばしば示したように，有機体化がどこで終わり，本能がどこで始まるかを我々が言いえないであろうほどに，「生」が物質を有機体化する作業を継続しているだけだからである。ヒヨコがその殻を，くちばしのつつきで破るとき，それは本能によって行

（458）　Bergson, Évolution（注364参照）p.633 et suiv.

動するが，しかしながらまたヒヨコは胚の「生」を通じて，本能がもたらした運動に従っているにとどまる。反対に，胚の「生」そのものの途中では（殊に胚が幼生の下で自由に生きているとき），本能そのものに関係付ける必要のある多くの進行が行われる。それゆえ，初期の諸本能の内で最も本質的なものは，現実的に「生」の諸過程である。それらに伴う潜在的意識は，最も頻繁に，行為の最初の段階においてだけ現在性をもち，そして後はそのプロセスの残余をひとりでになされるようにさせておく（前掲（4）・［A］参照）。潜在的意識は，それが「生」の生成的力と合致するためには，あくまでもそのようなものとして，広く開花し続いて完全に進化すればよいであろう。

（b）細胞に見る本能・蜜蜂に見る本能

人の身体における諸細胞も本能に従っており，また蜜蜂の各個体はこの細胞であるかのごとくして他の蜜蜂に統合されている。

人が生きている身体において，多数の細胞がある共通な目的のために働き，役割を分担し，各々が他のものと同時に自己のために生き，自らを保持し，自らを養い，自らを再生し，適切な防御的諸反応で危険の諸脅威に対応するのを見るとき，いかにしてそれだけの本能を考えないだろうか？しかしながらまた，それは細胞の自然的諸機能であり，それの生気の構成諸要素である。逆に，ある巣の蜜蜂が，個体のいかなるものも，ある時間を超えて孤立しては生きえないほどに，たとえ人が住処と食料を与えるとしても，そうであるほどに緊密に組織化されたあるシステムが形成されているのを見るとき，その巣は現実に，隠喩的ではなく，単一の有機体であることを，各々の蜜蜂が他と不可分な紐帯で統合されている，ある細胞であるところの有機体であることを，いかにして承認しないであろうか？蜜蜂を生かせている本能はそれゆえ，細胞が生かされている力と一緒になる，あるいはその力を延ばす。これのような極端な場合において，本能は組織

化の作業と一致する。

（c）物質の力ではない本能についての科学の認識不可能性

既にあることを認識しているかのように，自らの諸状態や行為を新たに生成してゆく本能は，記憶のごとくに過去の全体（「生」による有機体化の過去の全体）を引き摺っているから，記憶との比較なしには認識しえないものであり，それゆえ科学（知性）は物質の力ではない記憶を，認識しえないのと同様に，本能もまた認識しえない。

ところで，動物の諸本能が問題なのであれ，細胞の「生」的な諸特性が問題なのであれ，同じ科学と同じ無知とが現れる。本能においては，物事は既に認識があって，その細胞が他の細胞について，それに関係することを生来的に知っているかのように，その動物が他の動物についてそれが利用しうることを生来的に知っているかのように（前掲（4）・［B］・（a）参照），残りのすべては影の内にとどまるかのように，自らの諸状態や行為を新たに生成してゆく。ここでは「生」が，意識一般による生成のごとくに，我々の記憶（mémoire）による生成のごとくに，進行するのを，人は見ないだろうか？

おそらく，一群の二次的諸本能，そして多くの原初的本能の諸態様は，ある科学的説明を含んでいる。しかしながら，科学が現在のそれの説明の手法でもって，いつか本能を完全に分析するに至るのは，疑わしい。その理由は，本能と知性はある同じ原則の，前者の場合にはそれ自体に内的にとどまり，後者の場合には外部化して無機的な物質の利用に吸収される，ある同じ原則の異なった二つの発展であることである（本能は，「生」の推進力が意識であるとのその原則において，この原則がこの意識の内にそのままとどめたものであるのに対し，知性はこの原則が，確かに「生」の推進力である意識・精神の一能力として生成させたのではあるが，しかし機能的にそこから外部化させて，無機的な物質の利用のための能力とした

ことを指していると解しておきたい)。この継続的相違が，ある根本的な相容れなさと，知性にとっての本能を吸収する不可能性とを，証している。本能において本質的に存在するものは，知性的用語で表現されえないであろうし，従ってまた分析されえないであろう。科学はそのようにして，知性の用語で本能を表すことにより，それそのものを深く理解するよりはむしろ，それの模造品を構成するであろう(459)。

［B］進化論的生物学の本能に関する理論の不十分性

以上の考察からここで改めて，先に眼の構造との関係で詳論されていた(前掲Ⅱ・(5)・［B］・(b)・δ参照)，進化論的生物学の不十分性が，特に本能との関係で確認される。

(a) 胚の偶然的素質に基づく理論の不十分性

ここでは進化論的生物学の，巧妙な諸理論を研究することで，人はそのこと（本能の模造品を構成すること）を納得するであろう。それらは，二つの類型に帰され，あるときは，新ダーウイニスムの諸原則に従って，人は選別によって保持された偶然的な諸相違（différences accidentelles）が総計としての本能を生じさせたのを見る。：即ち胚の偶然的な素質に従って，個体により自然に実現された有用な前進が，偶然によりそれに同じ仕方で新たな諸々の完成が付け加えられるに至るまで，胚から胚へと伝えられたであろう。あるときは，人は本能を，劣った性質の知性とする，：その種によって，あるいはその種の典型のいくつかによって有用と判断された作用が，習慣を生じさせたであろう，そしてその習慣が遺伝的に伝えられて，本能となるであろう（新ラマルク説―次項（b）参照)。これら二つの体系の内で第一のものは，重大な異議を巻き起こすことなく，遺伝的

(459)　Bergson, Évolution（注364参照）p.635 et suiv.

伝承を語りうる利点を有している。なぜなら，それが本能の起源に置く偶然的な変容は，個体によって獲得されたのではなく，遺伝的伝承を可能とする胚に内在的なのだからである。反対にそれは，多数の昆虫のそれらのごとき賢明な諸本能を説明するのは，実際に不可能である。おそらくこれらの本能は，それらが今日もっている複雑性の程度に，一挙に到達したはずはなかった。；それらはおそらく進化した。しかし，新ダーウイニスムのそれのようなある仮説においては，本能の進化は幸運な偶然が旧い偶然に入り込むに至るであろうような，新たな部分の漸進的付加によってだけ，なされうるであろう。ところで，多数の場合において，本能が完全化されうるのは，単純な増加によってではないのは明らかである。：実際に，各々の新しい部分が，そうでなければすべてを駄目にする条件で，総体の完全な改変を要求した。いかにして偶然から，そのような改変を期待するのか？私は，胚のある偶然的な変更が，遺伝的に伝承され，そしていわば新たな諸変更がそれを複雑化させるのを待ちうるであろうことに同意する。私はまた，自然な選別がより複雑化した諸形態から，生育力があるのではない諸形態のすべてを排除するであろうことにも同意する。更に，本能の「生」が進化するためには，生育力のある複雑化が生ずることは必要であるだろう。ところで，それらの複雑化は，いくつかの場合において，ある新しい要素の付加が旧い要素のすべての相関的な変化を導く場合にだけ，生ずるであろう。誰も，偶然がそのような奇跡を成し遂げうるとは，主張しないであろう。

（b）意識的な努力に基づく理論の不十分性

この新ダーウイニスムの難点を克服しようとして，人はいずれかの形式の下で，知性に訴えるであろう。人は，生きている存在が，それにおいてより優れた本能を発展させるには，多少とも意識的で知性的なある努力によってであると，想定するであろう。しかしその際には，ある付けられた

習慣が，遺伝的となりうるということ，そしてそれはある進化を保証するために十分な仕方でそうなるのを，認める必要があるだろう。そのことは，更に言うまでもなく不可能である。たとえ人が，動物の諸本能を遺伝的に伝承される，知性的に獲得される（比率において少ないながら有する知性の能力によって獲得される）ある習慣に帰しうるとしても，人はいかにしてこの説明の仕方が，努力が時には意識的であると仮定しても，決して知性的ではない植物の世界，即ち運動のための神経諸要素をもたないものとして進化し（前掲（２）・［Ａ］・（ｆ）。α参照），それゆえに「生」の推進力である根源的意識による自らの状態の生成・創造の能力と，例外的に後出の本能による運動能力までは有するが，前出のように表象をまずもち，それを選択して履行（行為）する―ここでは継続的に努力を続ける―知性の能力については（前掲（４）・［Ａ］参照），たとえどれほど少ない比率であるにせよ持たないとされなければならない植物の世界に，いかにして及ぶのかを理解しない。しかしながらまた，つる植物がいかなる確実さと正確さでもって，それらの巻きひげを利用するのかをみるならば，ランが昆虫により受精させてもらうために，見事に組み合わされたどんな術策を行使するかを見るならば，いかにしてそれだけの本能を考えないだろうか？

（ｃ）双方の学説がもつ長所と短所

以上のことは実際，新ダーウイニスム論者の理論も，新ラマルク論者のそれも，放棄する必要があることを意味しない。第一の人達はおそらく，彼らが進化は個体から個体にであるよりはむしろ，胚から胚になされることを望むときには，彼らは正当である。第二の人達は，本能の起源にはある努力が存する（それが知性的努力とは，全く別なものであるにせよ）と言明するとき，彼らは正当である。しかし前者は，彼らが本能の進化を偶然的進化とするときに，おそらく誤っており，後者は彼らが本能を，それ

がそこから生ずる努力に，個体的努力を見るときに，おそらく誤っている。ある種が，それの本能を変更し，それ自ら（種）をも変更する努力は，ずっとより深く，もっぱら諸状況にも，諸個体にも，依存しないものであるはずである。それは，もっぱら諸個体のイニシアチブに依存するのではないし—諸個体がそれに協働するにせよ—，またそれは純粋に偶然的ではない—偶然がある大きな場所を保持するにせよ—[460]。

（d）本能と知性の差異の検討から明瞭となる「生」の進化の方向

これまでの本能と知性の差異の検討の結果として，「生」の進化の方向がどのようであったかがより明瞭となる。

「この面（本能と知性の差異—筆者）から見た「生」の進化は，人はそれをある真の理念に包摂しえないにせよ，より明瞭なある方向をとる。すべてが，相互に浸透し合っているであろう，ある巨大に多様な潜在性を担っている，全意識としての，ある大きな意識の流れが，物質に浸透したかのように経過する。その流れが，物質を有機体へと導いた。しかしそのことについてのそれの運動は，同時に際限なく緩慢化され，分けられた。実際に一方で意識は，翅を自らのために準備する蛹のように，まどろんでいたはずである。しかし他方で意識が含んでいる多様な傾向は，有機体の様々な系列—しかもそれらは，これらの傾向を表象において内在化するよりはむしろ，運動において外在化した—の間に分配された（前掲注410参照）。この進化の途中で，一方（植物—筆者）は段々と深く眠りに落ちたのに対し，他方（動物—筆者）は段々と完全に目覚め，そして一方の低活動性が他方の活動性に奉仕した。しかしその目覚めは，二つの異なった仕方でなされえた。「生」即ち物質を通して放たれた意識は，それの注意を，あるいはそれの固有な運動に，あるいはそれが（浸透せずに—筆者）通り

（460）　Bergson, Évolution（注364参照）p.638 et suiv.

過ぎた（無機的―筆者）物質に固定した。「生」はそのようにして，あるいは直観（自己の動性の発動だけに意識を固定している直観[461]―筆者）の方向に，あるいは知性（無機的物質への適応にだけ意識を固定する知性―筆者）の方向に向けられた。一見したところでは，直観（本能へと狭められる直観―前掲注461参照・筆者）が知性よりも望ましいように思われ，その理由は「生」と意識が，そこではそれらに内部的なままだからである。しかし生きている存在の進化の光景は，直観が十分に遠くへとは進みえなかったことを，我々に示す。意識はそれの覆い（内部的なままであるがゆえの覆い―筆者）によって直観（自らの動性の意識―筆者）の方へと圧縮され，それは直観を本能に狭めなければならなかったほどで，即ち本能に関係する「生」の非常に小さな部分だけを含まなければならなかったほどであった。；―意識はその「生」の小さな部分を，ほとんど見ることなくそれに触れることで含んでいるにせよ。この側からは，（意識の進展のための―筆者）地平線はすぐに閉ざされた。反対に，知性において自らを確定する意識は，即ち第一に物質に集中する意識は，そのようにしてそれ自体との関係で外部化する（直観・自らの動性の意識のように，それ自体の何かに注意を固定せずに，外部の物質に注意を固定することによって外部化する―筆者）ように思われる。；正にそれが，外部の諸客体に適応するがゆえに，それはそれらの真ん中を往来し，それら客体がそれに対置する障碍を回避し，無限にその領域を拡大するに至る。他方で，一度解放されるとそれは，内部に後退し，そしてそれにおいて眠っている直観上の潜在性（自己の内に眠っている，自らの行為・運動の動性に関する向上・進化をなさしめる潜在的な推進力―筆者）を目覚めさせることができ

（461）　運動がもつ性質としての「動性」を，我々に示しうるのは，時間がもつ純粋持続の形式で受容された直観（前掲注221参照）だけであることから（前掲２・Ⅳ・（２）・［B］参照），その動性のみに向けられた意識を直観の用語で表しているものと思われる。そして，この自らの自動的に発動される動性としての行為にのみ向けられた意識が，同時に本能に狭められるものであると位置付けていると思われる。

る」[462]。

（ｅ）本稿のこれからの考察範囲の限定

かくして，知性による科学的認識は，「生」の進化一般（知性の線での進化を含む）も，更にそこで知性とともに大切な線を形成している本能についても，本質的側面を認識させないとの論証がなされたいま，著者が次章（本小論ではⅣ）以下で検討すべき課題は，これまで進化の方向において明瞭にされた本能と知性の対立する流れを生成・創造の面から，より詳細に検討しつつなす，自らの進化理論の正当性の検証となるはずであるが[463]，本稿のこれからの紹介では，それが過大な量とならないように，最も重要と思われる人間の意識・精神による知性能力の生成・創造に関する論述を中心的に扱い，特に本能については，原則としてこれまでの論述にとどめざるをえない。かかる限定からは，様々な不足が生ずるものと危惧するところであるが，この点のご海容をお願いしたい。

（未完）

（462）　Bergson, Évolution（注364参照）p.647 et suiv.
（463）　Bergson, Évolution（注364参照）p.650 et suiv.